

春泥

久保田万太郎

青空文庫

向島

一

……渡しをあげたところで田代は二人づれの若い女に呼びとめられた。——小倉と三浦とはかまわずさきへ言問ことといのほうへあ
るいた。

「何だ、あれ？」

すぐにあとから追ツついた田代に小倉はいった。

「あれは、君……」いいかけて田代は「慶ちゃん、君は知ってるだろう？」

それがくせの頤あごをなでながらあるいている三浦のほうへ眼を向けた。

「チビ三郎の内儀かみさんじゃアねえか。」

ずけりと膠にべもなく三浦はこたえた。

「チビ三郎？」

小倉はその、体に合せて小さな眼を眼鏡のかげにすくめるようにした。

「千代三郎さ、あの。」すぐに田代は引取って「成駒屋んこの、それ……」

「あゝ、あの女おんな形ながたの。——寸すんのちよい短い……？」

「だからチビ三郎よ。」

「ずけりとまた三浦はいった。

「どっちだ、しかし？」小倉はその汐しお先さきに乗らず「ハイカラのほうか、銀杏返しのほうか？」

「ハイカラのほうだ。」

「それなら大したこたアねえ。」

「ねえとも、あんな。」三浦は吐出すように「だのに、あの。——何だ、あのふやけたざまア……」

「なぜ？」

「そうじゃアねえか、なぜって？——多寡たかが役者のかゝアじゃ

「アねえか。」

「多寡が何だつて？」

「役者のよ。」

「と、われくは？ —— そういうわれくは……？」

「だからよ、おなじ流れの身だからそういうんだ。 —— ことさら安くするんじやアねえが、そうならそうのように、役者のかゝアならかゝアらしく、まるで知らねえ面つらじやアねえんだ、おや今日こんにちは、とか、まアお揃いでどちらへ、とか、うそにもその位なことをいうのが至当じやアねえか。 —— それを乙う片づけの、いゝ間まのふりに、要ちゃんじやアない、そこへ行くの……？」

「だって、それは……」

「それも堅気の上りとか何とかいうなら仕方がねえ、手めえだつて芸妓げいしやをしているんじやアねえか。——うそにも愛嬌しやうばい稼業しやうばいをしているんじやアねえか。」

「……………」

田代は口をつぐんだ。

「どだい気に入らねえ。——あんまりものを知らなすぎる…………」

三浦は一人でそう毒を…………やがてそれが「三浦幸兵衛」と仲間うちにいわれる所以の…………ながした。小倉は、どこを風がふくといったかたちに、冬がれや、冬枯の…………しきりに一人、句をあんじながらあるいた。

いたずらにだゞツ広くひろがった向島の土手。——桜といった

ら川のほうにだけ、それも若木といえば聞えがいゝ、細い、脂やにツ
こい、みじめな、いえば気まじな枯枝のようなものゝしるしばか
り植わった向島の土手。——折からの深く曇った空の下に、むか
しながらの常夜燈の、道のどまん中にしら／＼と打捨うちちやられた
ように立っているのが、水の上の鈍く光るのと一しよに、あたり
のさまを一層霜げたものにみせた。——玉の井ゆき吾妻橋ゆきの
青い乗合自動車がそういつても間断なくその道のうえを行交ゆきかった
……

「おや？」

急に田代は立留った。

「何だ？」

その頓とんきよ驚な声におどろいてとも／＼三浦も立留った。

「牛うしの御前ごぜんがなくなつた。」

「牛の御前が？」

田代と一しよに三浦も土手の下をみた。——なるほど、そこには注連しめを張つた大きな銀杏のたくましく聳そそり立っているばかり、鳥居も、玉垣も、社殿も……牛島神社の影もかたちもが存しなかつた。——乾いた地膚の、空坊主からぼうずに、さむ／＼とたゞひろがつているばかりだつた……

「何てこツた。」

三浦はいった。——舌打するように。——半ば自分にいうように……

「どうしたんだろう、しかし。——どツかへ引越したんだろうか？」

その尾について田代はいった。

「そうには違えねえ。^{ちげ}——いくら何だつて土地の氏神の消えてなくなるわけはねえだろうから。」

「焼けたんだらうね、こゝ？」

「いつ？」

「いゝえ、震災のときに。」

「大焼けのこんくちきだ。——めん、こゝいら、火の海になつたんだ。」

「水のそばのくせにどうしてだろう？」

「その水が燃えたんだ。——たのみにおもうその水まで燃えてながれたんだ。——だから助かろうとして川ん中へ飛込んだ奴がみんな逆に命をおとしたんだ。」

「だけど、それは……？」

「みねえ奴には分らねえ。」ついと三浦は突ツばなして「とてもあとからおもい及べるこつちやアねえ。」

「そうかなア。」

渡しでいま越して来た川の上をいまさらのように田代はながめ

た。——どんよりいろに、冷めたく塗りつぶされた水のうえに浮いたいくつもの船。——浮世はなれた感じにぼんやり浮いていゝるそれらのなかを縫つていそがしく白い波を蹴立てる蒸汽。——

それは、田代の、いまのようにまだ役者にならない時分、しやうで 聖

天んちよう町の油屋の次男坊だったころ毎日のようにながめた光景だけしき

つた。——それがそもぐの身をもち崩しはじめの、近所では眼に立つ、店の隙をみては渡しをわたり、わざぐ須崎町まで清元の稽古にかよつた。——間もなくその師匠のもらい娘を連れて駆落をした。——いまからそれが十年まえのことだから田代の十九のときである……

「げんざい吾妻が死んでいる……」

ふいと小倉がうしろをふり返っていった。

「えゝ？」

田代は狼狽あわてゝ小倉のほうへ眼をうつした。

「いゝえよ、吾妻はこゝで死んだんだ。」小倉はしみ／＼した
拳とりなし止で「火に追われて小梅からこゝへ逃げたんだ。——土手へ
さえ出ればいゝと思つたのがあの男の運つぎの尽つぎだったんだ。」

「あの人が。——あの人が、しかし……」田代はいつた。「どう
してそんな死に方を。——大阪で聞いてあたしアびつくりした。

——みんな、いゝえ、はじめに聞いたときには誰もほんとうにし
なかつた。」

「そうだろう、それは。」

「それにあの人。……といえは麻布の狸まみあな穴あなにいるものとばかり此方こっちは思っている。——麻布にいるものがそんな目に逢うわけはない。——いゝ加減なことをいうにもほどがあると、その時分、ほんとのことのそろくもう分つて来はじめた時分だから、みんな楽屋でそういつてうわさした。」

三

「そうだ、それは。」小倉はうなずくように「これが吾妻でなくて三浦とでもいうなら、たとえばそれは麻布が四谷に住んでいたにしろ、そうかい、やられたかい、あの男？——どうで満足に

畳の上で死ぬる奴とは思わなかったが矢つ張そうだったかい？

——因縁じょうだんという奴は矢つ張……」

「戯談じょうだんだろう。」

三浦はわざと不機嫌にいった。

「いえば、しかし、そんなもんだ。」小倉はいつそ真がおで「吾妻のようなあんな善人があんな終りをしようとは誰しも思わない。

——そこへ行くと君なんざア、筋はいう、にくまれ口はきく、嫌がらせはいう。——誰をつかまえてもロクなことはいわねえ。——

——だからそこは人情で、三浦がこれくくだそうだ、向島で可哀そうに焼死んだそうだ。……といったつて誰もかばい手はない、ざまアみる、いゝきび気味だ、みんなそれも心がらだ……」

「だから、人間、平生ふだんが大切だいじだというんだ。」

それに乗って田代もいった。

「何をいやアがる。」三浦は逆に「俺にいわせれば吾妻こそ心がらだ。——彼奴あいつこそ心がらでそんなことになつたんだ。」

「すぐだ、それ。」田代はすかさず「どうして心がらだ? ——

どうしてあの人おとなが心がらだ?」

「音無おとなしく、彼奴、麻布の狸穴に引つ込んでればよかつたんだ。」

——何もこんな小梅さんがい三界さんがいへ這出して来るこたアなかつたんだ。

——こんなところへのこく、這出して来たりやこそ畢ひつきよう 竟ひつきようそんな

ことにもなつたんだ。」

「だって、それは。——仕方がないじゃアないか、それは。」

「なぜ仕方がない？」

「だってそうじゃアないか？——毎日まいんち浅草へ通うのに……公

園の芝居へ通うのにとても麻布からじゃア大へんだというんで此こ方つちへ越して来たというんじゃアないか？」

「よく知ってるな？」

「聞いたさ。——あとですつかり聞いたから知っているさ。」

「じゃア、吾妻が、どうしてそんな公園の芝居へ……それも喜劇の一座へなんか行くようになったかそれを知ってるだろう？」

「それは知らない。」

「何だ、知らねえのか、それを？」

「そんなことまでは知らないさ。」

「金になるからよ。」

「殴るぜ、ほんとに。」

田代はいきなり立留つて大きな声を出した。

「なぜ？」

三浦はわざとそうすました。

「素しろ人ろうとじゃアないんだよ、素人じゃア。」

「誰が？」

「あたしがさ。」

「あたりめえじゃアねえか。——いわなくつたつてそんな分つてるじゃアねえか。——どんなふみ倒しの屑屋にみせたつて堅かた気ぎとはみやアしねえ。」

「そんならそうのように。——そうのようにすこしは扱ってもらおう。」

「どうすればいゝんだ？」

「公園に出れば金になる位、このごろじゃア、おい、三つ子だつて知ってるんだよ。」

「だつて知らねえといったじゃアねえか？」

「それは相手があの人だからだ。——あゝいう金なんぞにこだわらない吾妻さんだからだ。——それでもない、どんなまた蔭にいきさつが……」

「下りるんだ、さア……」

いつかまたさきへ立ってあるいていた小倉がそういつてそのと

きふり返った。——そのまゝ三人は長命寺のほうへ土手を下りた。

四

門……といつてもしるしばかりの柱を左右に立てたゞけ。——

一すじつゞいた敷石の両側に、いろんな恰好をしたいしぶみの、
亡骸なきがらのようにすきなくならんでいる以外には、以前の長命寺を

しのばせる何ものもそこにみ出されなかつた。——名物さくらも

ちの古い店も、トタン葺ぶきの、あからさまな、みる影もないバラツ

クになり果てゝは、つみ上げた番重ばんじゆうと、天井から下がった鈴すず

生なまの烏帽子籠えぼしかごとが、わずかにその風流みやびをみせているだけ、色の

褪めた毛氈もうせんのむかしながらに客待ち顔なのがそうなつてはかえつていじらしい……

「酷ひどくなつたなア。」

三人は落語はなしの『おせつ』に出て来るので知つている一九いっくの碑のまえに立つた。——おもわず歎息するように田代はいった。

「本堂だつて、みねえ、焼けたツ放しだ。」

突あたりの、ぽつんと空いた地面のほうを小倉は頤で指した。

「あゝ、ほんとに。」田代は再び歎息するように「驚いたなア、しかし……」

「ちツともまだ手がついていねえんだ、こつちのほうは。」

「そうなんだねえ。——銀座なんぞあるいている分にはちツとも

もう以前もととかわらない気がするけれど……」

「こんな風にしてだん／＼名所もくそもなくなつて来るのよ。」

そばから、三浦は、はつきりそう結論を下すようにいった。――

――桜餅やの裏つ側に二三本咲き残つたコスモスも、その下にすくんだ鶏のかげも、柳北の碑の鼻の欠けた柳北の顔も、すべて惨めな、空しい、霜に荒れたそのあたりのけしきだった。

「……まだコスモスの咲き残り。」

小倉は自分にそう口の中でいつてみた。――それへ附ける上かみ五を工夫しながら、そのまゝまた、二人のさきへ立つてぼんやりあるきはじめた。

むかしはあつた……に違いない裏門の、しるしばかりの石段を

あがつて三人はまた土手へ出た。

「けどしかし、あの人。」ふいとまた田代はいった。「どうして、しかし、あの人が……？」

「……………」

だまつて三浦は田代のほうをみた。

「吾妻さんさ。——あの人のかつたから、自分からそんな売込むなんてわけはないと思うが……？」

「そんな器用なこと出来る男ならいつまであゝパイくしてやアしなかつた。」

「といつて買ひに。——さきから買ひに来るつてことも。……一体あの人どこに眼をつけたんだらう、さきじゃア？」

「ふん？」

三浦はわざと鼻でわらった。

「芸は勿論、柄がらからいったって、あの人。……どこをどうしたって、あの人、喜劇に向く人じゃアない。——われく『矢の倉』のうちのものゝなかで誰よりも一番そのほうの資格のなかった人だとあたしア思っている。」

「……………」

「それはあれだけの人だ。——あれだけの技倆うでをもった人だ。——だから喜劇へ行けば行ったでまたそれだけのことはしたに違いない。——したには違いなかつたらうが……」

五

「そんな役者じゃアねえ。」

と、三浦は、じゃけんにそれを遮さへぎった。

「そんな役者？」

「そんな潰つぶしのきく役者じゃアねえ。」

かぶせてまた三浦はいった。

「けど、それは……」

田代は肯うべなえない顔をした。

「買かいかぶ冠かぶつていたんだ。——お前めえばかりじゃアねえ、みんな買冠

つていたんだ、あの男を。——決してあの男、うめえ役者でもな

ければ上手な役者でもなかつたんだ。」

「でも、しかし……」

「喜劇が出来るの出来ないの、そんなどころの沙汰じゃアねえんだ。——どだい、そんな、——はじめツからそんな技倆うでのある役者じゃアなかつたんだ。」

「そ、それアいけない、それアうそだ。」田代は躍起になつて

「そんなことをいうツて法はない。」

「あるからいうんだ。」三浦はあくまで冷かに「彼奴あいつの役者になつたそもくから俺ア知つてゐるんだ。——まだ、彼奴が、九州の果から果をうろついている時分から俺ア知つてるんだ。——大だい根こん、大根だいこんで、どこでも相手にしなかつた役者だ。」

「そんなこといったってそれアいけない。——以前はどうでも——以前はどんなだつても『矢の倉』へ来てからは——『矢の倉』の弟子になつて東京にいついてからは……」

「それツてというのが手めえで光つたんじゃアねえ。相手に光らせられたんだ。——無理から相手にそうさせられたんだ。——それには、奴やつの、これという芸やっのなかつたのが反つてその役に立ったんだ。」

「それにしたつて。——それにしたつて、しかし……」

「止よせよ、みツともねえ。」わらつて小倉は立留つた。「どツちだつていゝじゃアねえか、そんなこと……」

「あんまり、だつて、いくらなんでも僧にくて体てなことをいいすぎる。」

田代はムキになつて「あたしア好きだつたんだ。——あの人があ
たしア好きだつたんだ。」

「俺だつて嫌きえじやアなかつた。——毒のない好いい人間だつた。」
すぐ、また、三浦はいつた。

「じやア、なぜ。——そんなら、なぜ？」

「俺もあの男をむかしから知つている。」小倉はしずかに中をと
つて「だからしだいはよく知つている。——が、三浦のようにい
つてしまつちやア実も蓋もねえ。」

「が、それに違えねえもの。——あの男の巧いの味があるのとい
われたのは畢竟『矢の倉』の大将のつかい方がよかつたからだ、
いえば、それア、あの男ばかりじやアねえ。——菱川だつて西巻

だつて古く『矢の倉』のうちにいるものはみんなそうだ。」

「が、そこはあの男は正直だつた。——自分でよく知っていた、それを。——菱川や西巻のように決して自分をそれほど役者たア思つていなかった。」

「だから……だからいうんだ、俺は。」三浦は力を入れて「世間じやア、しかし、いっぱし手めえで納つた役者のようにあの男を思つている。それじやア可哀想だ、あの男が……」

「じやア何だつて公園へ。——何だつて、あんなところへ……？」
田代は突ツかゝるようにまた話をあとへもどした。

六

「買われたんだ。——立派に引ッこ抜かれたんだ。」三浦はしかしケロリとした感じに「が、さきじやア役者として買ったんじやアねえ、おもての人間として買ったんだ。」

「おもての人間として？」

「そうよ。——敵は本能寺、何もあの男がほしいんじやアねえ、もつと外に入用なものがさきにはあつたんだ。」

「……………」

「分らねえか？——さきじやア若宮がほしかったんだ。」

「若宮君が？」

「若宮を引ッ張りたいために吾妻を引ッ張つたんだ。——若宮に

とつて吾妻はたった一人の伯父さんだ。——つまりはだからおとり。

——彼奴あいつはつまり若宮を引つ張るための囹おとになつたんだ。」

「だって、それは……」

「何が？」

「いゝえ、若宮君を。——人もあろうにあの人を。——そんな乱暴な……」

「そうよ。乱暴よ。——随分無茶な話よ。——が、それを承知で無理からしかけたいくさだ。」

「それより若宮君を引つ張つて。……いくら若宮君が綺麗だからつて、いくらあれだけの人気をもっているからつて、あの人を引つ張つてあの人に喜劇の出来ようわけがないじゃアないか。」

「誰が若宮をつかまえてそんなことをさせる……」

三浦はわざと声を出してわらった。

「矢つ張じやア表の人間にか？」

田代は皮肉のつもりでいった。

「新派をやらせるんだ、新派を。」三浦はそれにはこたえず「はじめはあの楽^{らく}天^{てん}団^{だん}の喜劇の間に一幕か二幕挟み、そのうちに汐さきをみて『若宮一座』というものをおッ立てようと先方^{さき}の肚^{はら}だ」。――

「そんなことを、あの、楽天団の奴は？」

「どうして、あの楽天坊主、一筋縄で行く奴じやアねえ。――肚の底を叩いたらどんなまだ太^ふえことをたくらんでるか分ったもん

「じゃアねえ。」

「が、若宮君。——勿論、若宮君、乗りやアしなかつたらうね、そんな話に？」

「気の早え。——まだ、その、吾妻を引つ張つたばかりなんじゃアねえか。」

「だって……」

「ほんの、まだ、小手調べのすんだばかり。——ちようどそこへがらくくツと来たもんだ。」

「あ、地震……」

「何もかもそれで市が栄えたのよ。」

「と、吾妻さんは……」

「だから一番馬鹿をみたのは吾妻だ。——わざく／＼死に／＼狸穴から這出したようなもんだ。」

「ほんとうに。」

「いゝやな、しかし……」ふいとまた小倉は口を出した。「その代りには、あの男、生れてはじめて二千と三千纏まとまったものを握ったんだ。——門のある家へ入へつて急に三人と書生を置いたんだ。」

——いっそ思い置くことはあるめえ。」

大倉の別荘のまえをすぎていつか三人は中の渡しのまえをあるいていた。——その、入江になっているすこしの部分の、いま汐のあげている最中であろう、たつぷりした感じにふくれた水が、二三本の枯れた雑木の影と、まだ出ない渡しの中の若い女の赤い

帯とをさびしくうつしていた。

「あい、御免よ。」

注連だの輪飾だのを一ぱいに積んだ車がいそがしく三人の間を通つて行つた。——新しい、すがくしい藁の匂が激しく三人の鼻を撲った。

「市か、もう……?」

つぶやくように小倉はいつた。——聞えなかつたのか、三浦も、田代も、二人は何ともいわなかつた。

七

やがてまた三人は土手を下りた。それが向島へ来たそもくの目的の、百花園へ行くために、下りてすぐの道を左へ切れた。そこには新開町らしい小さな店がごたく軒をならべていた。——こぎれや小切屋のおもてに下ったけばくしいメリンスのいろが、あたりの沈んだ、引つ立たない空気を無理からあかるくしていた。

「変つたなア、こゝいらも……」しげくと田代はみ廻して「けど、焼けなかったのかしら、こゝは？」

「焼けなかったんだ。」小倉はこたえて「わずかなところでこゝいらは助かったんだ。」

「それにしても一めん田圃だったんだがなア、せんには……」
が、そこをまた右に折れると大きな泥溝……というよりは流れ

といったほうが似つかわしい……そうした感じの寂しい水がそれ／＼の家の影を浸してながれていた。それがそのあたりの田圃だった時分のさまを可懐なつかしくおもい出させた。——それにはその道の上に嵩高かさだかにつまれた漬菜つけなのいろ。——二三人の女たちの、洗つてはそばから戸板のうえに載せているその、くつきりした、白い、みずくしい色が一層その鄙びた感じを深くした。

「まだか、おい？」

三浦のそういうのをわらつて小倉は前方まえを指した。

「そこだ。——そこにもうみえている……」

「春夏秋冬花不断」「東西南北客争来」とした二枚の聯れんを両方の柱にかけた茅葺かやぶきの門を間もなく三人はくゞつた。——そこには、

まず、入つてすぐの、萩、尾花、葛、おみなえし女郎花、藤袴……：：：そうした立札だけの荒れた土の中にむなしく残つた一廓くるわの境界けいかい。——そのしかえられたばかりの、つやゝかに、青々とした竹のいろがいたずらに冷めたくその間で光っていた。——すべてのその枯かれが々とした中で、みるかぎり、どこにも人のいるらしい影はなかつた。

「しずかだなア。」

田代は感歎するようにいった。

「あたりめえよ。——この寒空にこんなところへ来るのはよッぽどすいきような奴かヒマな奴かだ。」

「じゃアわれくは。——どっちだ、われくは？」

「こちとらは両方よ。」

「両方？」

「そうじゃアねえか？——すいきようばかりじゃアねえ、ヒマだから。——ヒマで、もう、体をもちあつかっているんじゃないやアねえか？」

「たまにはいゝんだ。——たまには骨休めに……」

「といつてるうちに頤の干上るの知らねえな。」

「ふん、じょうだん戯談だろう。」

「まア安心しねえ、当分芝居はあかねえから。」

「いゝよ、あかなくつても。」

「かわい可哀や、妹、わりや何にも知らねえな、だ。」

……三人の行くてには、まだ刈られない薄すすぎの立枯が、ぼうくとそのまゝわびしく、水のように白く束ねられていた。

八

その枯薄のあいだを三人は池のふちへ出た。そこには、蒲がまだの藺いだのが、灰白く、かさくにかたまり合つて枯れていた。——風のない曇つた空をうかべた暗い水がどんよりとそのかげに身じろがなかつた。

「何と、また……」感歎するやうにまた田代はいつた。「以前もとのまんまだ。——ちツともこゝは変らない。」

「いつ来たんだ、お前めえ？」

「いつ来たつて、もう。——よつぽど以前まえだ、大阪へ行くまえだから七八年まえだ。」

「七八年？」

「だのに——だのに、ちツとも……」

可なつか懐しそうに田代はあたりをみまわした。

「俺なんざア日露戦争のすぐあとに来たつきりだ。」三浦はわらいもしないで「覚えているだろう、貴公は？——その時分こゝで『怪談会』のあつたことを？」

「知らねえ。」

小倉はハツキリこたえた。

「そんなわけアねえが？」

「日露戦争の時分じやア、まだ、こつちは旅をあるいていた。」

「じやア俺のほうが、さきへ君より東京へ出て来た勘定か？」

「そのはずだ。」

「俺にしたつて、しかし、出て来たばかりのときだった。——歌

舞伎座で『矢の倉』と、死んだ柳田さんとが合同して『牡丹燈籠』

を明治に直した『恋無常』つて狂言をやることになった。——で、

そのまえに、いまでいえば宣伝だ、景氣づけにこゝで『怪談会』

をやったもんだ。——大した、また、それが人気になった奴よ。」

「誰が来たんだ？」

田代が口を出した。

「誰がつてみんな来たのよ。——東京中の新派という新派の役者はみんなあつまつた。——それへ持つて来て河岸かしや兜町の客筋、新聞記者や文士、新橋柳橋芳町から手伝てんいに来た連れんじゆう中ちゆうだけだつてすさまじいものだった。——とにかく『矢の倉』の売出すさかりだったんだ。」

「で、一体どんなことをしたんだ？」

「それがよ、はじめのつもりじゃア皮切りにまず商売人が怪談ばなしを一席やる。——つゞいて誰かそんな話を持合している奴が五六人出てせい／＼怖がらせる。——と、ちようどそのうちいゝ刻限になるから、一人でこの草の中を通つてあずまやへ行き、そこへめい／＼名前を書いて来るといふ趣向……だったんだ。——

たか／＼来て四五十人のつもりだったからそんなことも考かんげえたんだ。——が、いざ当日になると来たのがそのざつと五倍……」

「と、二百……」

「うそをいやア隣の料理屋……といったつていまあるあれじゃアねえ……どの座敷も人で身動きも出来ねえ位くれえだった。——だから口の悪い奴はいった、これじゃア怪談会でなくつて怪談祭だ。」

「いゝことをいやアがる……」

そういうながら小倉は池に沿つてしずかに足を運んだ。

「そうなたらもう趣向も蜂のあたまもあつたもんじゃアねえ。」
三浦も田代もともにそのあとに従いながら「七月はじめの夜の短けえさかりだから、一人ずつその名前を書きに行った分には夜が

明ける。——そこで二人ずつ、三人ずつ——多いのは五人十人隊を組んで押しかけるんだから凄いいことも何にもねえ。——こまつたのは虫笛だ。——矢つ張それもはじめに趣向して、どしこと虫屋から仕入の、あっぱれ草の中へ伏勢ふせぜいを置いたのはいゝ、いざとなるとその騒ぎだ、驚いて此奴こいつが一匹だつて鳴いてみせねえじやアねえか。」

九

……で、これではいけないと急に狼狽あわてゝ、とゞ大部屋のものと三人があたりの闇を幸い、丈なす草のしげみにかくれてほんと

うの虫笛をふくことになった。——そのなかの一人にえらばれた三浦だった。

「新参のなさけなさには嫌といえねえ。——そこがいまの大部屋と違ふところで、その時分そんなことをいおうものなら、生意気な野郎だ、ふざけた畜生だで折角辛苦して入へえった一座をたちまちクビだ。——仕方がねえと外の奴らのいゝ機嫌にくらい酔つてる中で、さんだらぼツちを持って俺ア草の中へもぐずりこんだ。」

「何にしたんだ、さんだらぼツちを？」

「尻へしいたのよ。——そのうえにつぐなんで、一晩中、蚊にくわれながらパイ／＼やったのよ。」

「で、うまく行つたのか、それ？」

田代のそう笑いかけるのを、

「じゃアねえ、ほんとうだ。——ほんとうのこつた。」三浦はすぐに押えて「そのときツきりだ。——そのとき来た以来だ。」

草に、木に、水に、夢のようにすぎた二十年の月日の、どんなその破片でもいゝみつきたい、さすがに三浦もそうした寂しいとりなしをみせた。——夏なら木下こしたやみ闇の、枯れ枝ながら鬱陶しくさし交した下は、溜った落葉の、土の匂も湿しけて暗かつた……

「君は来るのかい、始終？」

小倉のほうを向いて田代はいった。

「始終も来ねえが三月に一度位ずつは来る。」

「何しに来るんだ？——矢つ張発句のほうの……？」

「そうじゃアねえ、ぶらツとたゞ来るんだ。——芝居のたまの休みにこゝへ来てぶらくするほどいゝ心もちのものはねえ。」

「三浦の釣堀と一対だ。」自分だけ田代はうなずいて「どうだ、そつちは？——行つたかい、もう？」

「行かなくつてよ。——二三日つゞけて行つたが面白くねえから止よした。」

「どうして？」

「いま小倉のいった通り、俺の釣堀だって芝居のたまの休みに、それこそ一日いちんちか二日の忙しい中を無理をして行くからこそたのしみにもなるんだ。——今度こんだのようにまるく一月休みの、来月だって稼げるか稼げねえか分らねえ。汐しおぎかい境かいに立って釣どころの

沙汰じゃアねえ。——人情はそうしたもんだ。——なア小倉？」

「そうよ。」

「けど。——けど、それは……」田代はあくまで肯えない顔で

「先刻さつきから聞いてればへんなことばかり君たちはいうけれど……
どうして……どうして一体そんなことがいえる？」

十

「どうしてそれがお前めえに分らねえ？」三浦は鸚鵡おうむがえ返しに「こつちにするとそういいてえ奴だ。」

「けど、あたしア、昨日きのうも『矢の倉』へ行っているんだ。——

『矢の倉』へ行つて大將に逢つているんだ。——大將ばかりじゃアねえ、ちようどそこへ奥おくやく役が来てしばらくあたしア奥役とも話をしたんだ。——だが大將も何ともいわなければ、奥役だつて何ともそんなこたアいわなかつた。」

「いうと思うのか、正直に？」

「それアいうと思う。——げんにあたしア、来月はどこです？」

——そういつてあたしア聞いたんだ。」

「何とிட்டた、そうしたら？」

「どこになるか小屋はまだ分らない……」

「みねえ、それ。——いゝ証拠じゃアねえか、それが。——そも

く幾日だと思ふんだ、今日を？」

「十二月の十五日さ。」

「いつものことにしてみねえ、いつもの？——いまごろまでいつも小屋も決らねえ、狂言も分らねえ。……あつたか、いまゝでに、そんなためしが？」

「それはなかつたさ。」

「つまりは会社と手が切れたんだ。——俺たちア、もう、みんな会社をクビになつたんだ。」

「そ、そんな馬鹿な……」

打捨うっちゃるようにいつた田代のそのいいかたのかげにすこしの狼

狽きのほのめくものがあつた。そういえば——そういえば昨日きのうでも

……

「いゝさ、まア。——どうせいつか分るこつた。」三浦はそれを見透かすように冷かに「お主ぬしのようなふところ子はいざというときまで知らねえ面でいれぱいゝんだ。」

「でも。——でも、しかし、そうならそうのように……」

「止せよ、また。」

小倉は眉をひそめるようにした。

「だって、君……」

「はつきりそうとまだ決つたこつちやアねえんだ。」小倉はしづかに宥なだめるように「たゞそういう気配が俺たちには察さしられるんだ。——橙だいだいのかずをよけいくゞつて来ているだけに、お前めえなんぞよりいろんなことがヒョイくとわけもなく俺たちには感じられ

るんだ。——もしやと思うことが大ていその通りになつて俺たちのまえに出て来るんだ。」

「と、じゃア、矢つ張……」

「かりにそうなつたつていゝじゃアねえか？——俺たちには

『矢の倉』というものがついているんだ。——『矢の倉』というしつかりした師匠がついているんだ。——会社と縁が切れたつて天下に仕打しうちは大ぜいいるんだ。」

「それは——それはそうだけれど……」

「師匠にさえくつついていれば、あの師匠、決してそんな座員を路頭に迷わせるようなこたアしねえ。——喰つてく位ぐれえのかしきはどんなことをしたつてつけてくれる。——いまゝでのようにたゞ

「いう目の出なくなるばかりだ。」

「……………」

そのまゝしばらく話は途切れた。——土橋をわたり……………土橋の下には枯れた蓮の太い茎がらちもなく水に潰っていた。……………障子の閉ったお成座敷なりざしきのまえを通つて、三人は、散在しているあずまやの、そのなかの一つにやがて腰を下ろした。——そこには競い立った梅の梢……………そうした梅の枝々がみえない影をしら／＼とそのあたりに落していた。

「お、鶴がいるぜ、鶴が？」三浦はどんなものでもみつけたように「むかしアいなかった。むかしアあんなものはいなかったぜ。」
「そういいながらすぐまたその檻のほうへ立って行つた。」

「どうした、おい、田代？」小倉は女中の運んで来た急須きびしよの茶をつぎながら「何をそう急にだまってしまったんだ？」

「急にいま……何だかこう急にいまおちぶれたような……」

「おちぶれた？」

「そんなような、心細い、なさけない気になったんだ。」

「馬鹿だなア。」

小倉は憫むようにわらった。

三羽鳥

小倉と、三浦と、田代と三人がそうやって向島をほつつきあ
っているとき。——もつと、もし、くわしくいうなら、ちようど
その三人が長命寺の境内をまた土手へ出、死んだ吾妻一郎につ
いて三浦と田代としきりに議論をしながらあるいているとき、おな
じ一座の西巻は……かれらの兄弟子で古い三枚目の西巻金平は一
人寂しく矢の倉の河岸かしを両国のほうへあるいていた。

その日、西巻は、その前の日田代もそうしたように久しぶりで
師匠のところへ顔を出した。歳暮の挨拶かた／＼その後の模様

……というのは、十一月の、会社では地方へ出すつもりでいたのを師匠が強情張って無理にあげさせた本郷の芝居、それがあんなりぞつとした景氣をみせなかつたのである、従つてそこに、師匠と会社との間に、またしても氣不味きまずいものゝ出来たといううわさが樂らくになるすこしまえ樂屋の一部にしきりに行われたのである：
：をそれとなくさぐつてみたい肚だつた。——勿論、そうはいつでも、西巻は会社を信じ師匠を信じていた。よしそんなことがあつたにしろ、そのために、いまさらその位なことのために自分たちの一座がどんなことになる。——そんなことは、たとえば小倉や三浦のいうような、そんな惨めな、縁喜えんぎでもないことは毛ほども西巻にはおもしろいつけなかつた。師匠と会社との間はそんなもの

じやアない、自分たちの一座と会社との関係はそんな生なま優やさしいものじやアない、随分、これまで、会社のためになつてゐる師匠なり自分たちの一座なりだ。会社にしたつてよくそれを知つてゐる。……だからその心配するところは、正月東京で芝居が出来るかどうかということである、十一月無理を通してゐるだけ、ことによると竹しつ篋べがえ返しに、大きに春は名古屋へでもやられるかも知れない。春そう匆そう々そうしかし地方たびは有難くない。——そうした、ぞんきな、一すじな料簡をもつことにおいて西巻はかれより二十幾つも若い田代と相あい如しくものがあつた。

というのも畢竟、西巻は、同じ師匠のうちのものになつてゐても、小倉や三浦、死んだ吾妻なんぞとはそもゝの育ち……役者

としてのそもぐの育ちが違っていた。そのあるいて来た道がまるで違っていた。小倉でも、三浦でも、吾妻でも、いえばそれらの人たちは、みんな好き勝手に役者になり、さんざ旅を叩いたり、自分大将の一座をもつて押しまわしたり、切迫せっぱつまつてはタンカラでも稼いだり、それこそありとあらゆる修行をしたあげく、立寄らば大木のかげ、改めていまの師匠のところへいゝ加減ふみしだいた草鞋をぬいだのだったが、そこへ行くと西巻は、その中の誰よりも年をとりながら、そうした浮世の荒い波風をほとんどかれ自身のうえに知らなかった。——二十一の夏、いまの師匠の手ではじめて役者になって以来、三十年にあまる長い月日を、由良のうちの西巻と、影の形にそうように一日も……というとうそに

なる、二十五六の時分、たった一度、由良が体をわるくしてしよにその芝居をしていた倭やまとの座を急に途中でぬけたとき、そのまゝ西巻は倭につれられて大阪へ下った。——それからそれ半年ばかり九州路をまわつて久々に東京へ歸つて来ると、由良は、横浜で無人ぶにんのさびしい芝居をあけていた。そのあと倭のほうは歌舞伎座で花々しく蓋をあけることになつていたが、西巻はそれを聞くと、片つ方をふり切つてすぐに横浜へ馳けつけた。……だからその半年だけ側にいなかつたきり、あとはずっと、どんなことがあつても決してもうその手もとを離れなかつた。……

ことのついでにいつてしまえば、もと西巻は、日本橋の石こくちよ

町う、銀町しろがねちよう、伝馬町てんまちよう……その界限を担いであるくぼてふ

りの肴さかなやだった。お定りの芝居好き、どこの座でもあいて三日目までにみなければ気がすまず、五代目の弁天小僧をみて自分の腕に桜のほりものをする料簡になったり、得意さきでおだてられるまゝ稼業そつちのけに声こわいろ色をつかつて聞かせたりしていたうちはまだよかった、それが嵩こそうじて「役者になりたい」になり、伝つて手をもとめて二三人の旧役者のところへ弟子人をたのんだ。一人のところでは肴やというこれまでの稼業がいけないといつて断られ、一人のところでは体よくうやむやに追返され、一人のところでは

その不心得を懇々とそういつても親切にさとされた。一時はそれ
であきらめる気になったものゝ、妄執の雲のほんとうにまだふき
晴れなかつた証拠には、ある日、朝、いつものように河岸へ買出
しに行つたとき、たま／＼その問屋の店さきで何ご／＼ろなく取上
げた新聞のある報道がかれのその望みをたちまちまた燃えあがら
せた。それは浅草座でやる倭一座の『日清戦争』の狂言にいりよう入用
な臨時雇募集の広告だつた。——その新聞をもらつて腹掛のなか
へねじこむとそのまま、空のはんだい盤台を引ツかつぎの……というの
は、その日酷いシケの日でさかなは何にもなかつた。——途中、
とある橋の上にかゝつたとき、いきなりかれは、かついでいたそ
の盤台をまないた狙もろとも川の中へ投げこんだ。——夏の終りの曇つた

日で、秋めいた冷めたい風が、水の上を、その橋の袂の鬱陶しく繁った柳のかけを、心さびしく吹いて通った。——そうした鑄いかけ掛松まつの……とんだその鑄掛松の真似も、かれにすれば、今度こそ是が非でも望みをとげるそのためにはまず肴やを止めるこつた。——そうした強い決心をすこしでもよけいに自分にはつきりさせたいためだつた……

その午後、すぐかれは支度をして、その浅草座座附のある茶屋に倭をたずねた。河岸かしのそろいの浴衣に八端はつたんの三尺、脚絆がけ、手に菅笠をもつたそのときのかれのいでたちであつた。——志願者全部をあつめてそのなかゝら選抜する、だからもう一度明日来い、が、その恰好ではいけない。——倭の代理として出て来た若

い男はかれにそういった。かれは丁寧にあたまを下げ、引下つた。あくる日、かれは、いわれた通りの飛白かすりの筒つつつぽ、天竺木綿の兵児帯へこおび……勿論それに汚れくさつた手拭を下げることをかれは忘れなかつた……という昨日とはまるで違つた拵えで再びその茶屋の門に立つた。百人近くあつまつた志願者のなかへかれも加えられた。——やがてそのなかゝら抜かれた二十五人のうちの一人に入つたと知つたときのかれの喜びはどんなだつたらう……

その日からすぐかれは稽古に入つた。わたされたかれの役は「戦争」の場に出る総出の支那兵だつた。

毎日いさんで芝居へかよつた。

大枚十六銭ずつの日給をかれはもらつた。

三

倭一座のその興行は大当りに當つた。——たゞに當つたばかりでなく、その一興行によつて、「書生芝居」というものが東京の劇壇にはツきりした存在を……ゆるぎのない根ざしをもつことになつた。役者としてよりも興行師としての手腕をより多くもつ倭は、その機を外さず、すぐまたかぶせて二の矢を継いだ。今度は前とまるで眼さきの変つた探偵芝居をやつた。——そのとき二十五人のその臨時雇のうちからさらに篩ふるつて五人だけ見習生に取立てた。——その筆頭がかれだつた。

偏ひとえにそれはかれの如才なさのたまものだった。たとえば、かれは、支那兵に扮するのに頭あたま髪を丸坊主にしてかゝった。舞台の合い間には何くれとなく、自分からすゝんで上の役者たちの用を足した。それにはそれまでの稼業柄、すべて猪牙ちよぎがゝりに気を軽く、いうことでも齒切がよく、何をさしても決してソツがなかったから、坊主、坊主とだれからも調法がられた。——とりわけ客員の由良には、かれがその一座でのめずらしい江戸っ子だったことを以て……ということとは、その一座、上下合せて三四十人いたその大ていものは関西だった。そもくの倭からして京都の産だった。……ことさら眼をかけられた。——美貌の持ちぬしとして、本筋のいやみのない芸のもちぬしとして人気の高かった由良

はいうまでもなく東京の生れ東京の育ちだった。

見習生になると一しよに、改めてかれは、自分から由良の草履をつかむことにした。そのあとまた乙部座員になり、大部屋頭になり、首尾よくついに甲部座員に昇進するまで三年とかれはかゝらなかつた。どんくゝかれは出世した。——柄がらはなし、顔はわるし、どこに一つ役者らしい取柄のないかれのそうした出世は、つまりはそれも如才なさの、たゞもう「凝る」……役に「凝る」……それだけのことだった。——たゞそれだけがかれの生命いのちだった。——通りぬけの、どんなつまらない仕出しでも、つまらなければつまらないほど、どうにでもしてそれを生かそうとのみつねにかれは苦勞した。——いえば、投なげ遣やりな、大ざっぱな、ぶツきら棒

なその仲間たちのあいだを縫って、はつらつと、若鮎のようにかれは閃いた。

倭とわかれて由良の手もとに返ってからは一層その影が舞台に濃くなつた。由良の一座になくはならぬ愛嬌ものになつた。かれが出るとわけもなく客は喜んだ。劇評家たちは、その見巧者みこうしゃぶりをみせたいため、興行毎に必ずかれについて必要以上の筆を費した。——かれとして有頂天にならざるをえなかつた。

ちようどそのころである。市村座で『闇黒世界』という西洋種だねの新狂言をやることになつた。「本読ほんよみ」を聞くと、その中に、主人公の催眠術師が一人の男をその術にかけ、自由自在にそいつを翻弄するところがあつた。——黙って聴いてはいたものゝ、由

良の催眠術師でその術にかゝる男は自分——そう来るもの、そう来なくつちやアならないものとひそかにかれは北叟ほくそえ笑んだ。——
 そうでなくつてもコヤの軽いことを始終味噌しじゆにしているかれである。……が、やがて役割の決ったとき、その役はかれのところへ来なかつた。その役をするものは外にあつた。……

四

かれは口惜しかつた。その晩、一晚、まんじりとも出来なかつたほど口惜しかつた。——夜明けに三十分ほどトロくとしたと
 思うと、いつだか歌舞伎座でみた『ごじゆうさんつきおうぎのしゆくづけ五十三次扇宿附』

の「古寺」の場での五代目の怪猫がおくらの役を好き自由にじやらす夢をみた。——かれ自身そのじやらされるおくらの役になつていた。——何しろ五代目の相手である、もしこれをしくじつたら二度ともう舞台へ出られない。……そう思つてかれは一生けんめいだった、これさえうまく行つたら死んでもいゝつもりだった。——と、うむ、うめえ、お前は器用だ、書生役者なんぞ止めて俺の弟子になれ、……五代目にそういわれた。——やれうれしや。——そう思つたとき眼がさめた。——枕許に心細く籠洋燈かごランブが消え残つていた。——自棄やけで、その晩、何としてもうちへ帰れないまゝ、平生ふだんひいき鼻負ひいきにしてくれる浅草の待合へころがりこんでしまつた奴である……

が、そうはいっても表立ってまだそんな苦情のいえる役者ではなかつた。たゞお客の間に評判がいゝというだけで、甲部座員とはいえ、いたつてまだ楽屋では榮はえない身分だつた。——由良という人のそこが堅いところで、いくら可愛い弟子でも、いくらその人間が仕出来しでかしても、だからといってそれだけのまだ貫禄もないものに決してそんな依怙えこの沙汰はしなかつた。どこまでも東京人らしい律義さで、本末もとすえをはつきりと、立てるものは立て押えるものは押えた。——由良一座というものゝ団結の、その後でも事なくずっと泰平につゞいて行つた所以である……

せめてその役をうけとつた奴がどんなことをするか？ どんな不味いことをしてカスをくうか？ ——よそながらそれをみて、

ざまアみろ、出来るもんか、そんなこつて師匠がうんというものか、そういつてひそかに自分だけ溜飲を下げるのが当時のかれとして出来るせい／＼の心ゆかせだった。その目的でばかりかれは稽古に入った。——生憎なことに、また、そのときに限つて、かれの与えられた役は凝ろうにも凝りようのない車夫の役だった一つだった。

案の条、その役者、一日稽古をしたゞけで落第だった。体のおもうように動かないのがそも／＼由良の気に入らなかつた。軽く、たゞもう軽くというのが由良の註文だった。——とてもだからいけなかつた……

「出来なきや仕方がねえ。……出来ねえものを無理にやれとはい

わねえ。——だが、それじゃアこつちの芝居が出来ねえ。」

……つねはそうした荒い物言をする由良ではなかった。たゞ舞台のことについてだけまれにそう癩癩を起して巻舌になった。同時にそうなるこれ何う車を横に押すか分らなかった。——誰も、手をつかね、鳴りをしずめてその雲行の険しさをみまもるばかりだった。

「軽業師を呼んで来ねえ、軽業師を。——軽業師なら出来るだろう。」

とゞ話はそこまでこじれて行つた。そこまで由良はつむじを曲げた。——そのときたまらなくなつてかれは飛出した。——夢中でかれはその役をやらしてくれと由良のまえにいった。

「出来るか、お前めえに？」

「出来ます。」

「きツとか？」

「へえ、きツと。」

その晩からかれはうちへ帰らなかつた。一人芝居に残つて稽古をした。蠟燭をつけて三階で夜の明けるまで一心に稽古した。

五

一心にそう稽古した甲斐はあつてみごとにかれは成功した。一座のものさえ驚くようなケレンをかれはやってみせた。ことに最

後のイルカ飛。——立っている人間を一しよに三人飛越すくだり
については、初日にみて、由良にしてその鮮さを激賞した。——
果してその一幕が評判になり日々見物は突ツかけた。——こと／＼
くかれは面目をほどこした。

と、ある日、その日も満員という大した景気の日だったが、い
つもの通り十分にその「狂い」をみせたあと、いよ／＼という最
後のとき、どうした機はずみかまんまとかれは飛び損った。前方まえへの
めつて前歯を折り奥歯で片頬を貫いた。——衣裳の洋服はたちま
ち朱あけにそまつた。

そのまゝ楽屋へかつぎこまれたかれは一日一晚というもの意識
を恢復しなかつた。それほどの大怪我だった。が、一日いちんち隔おいた

そのあくる日は河岸かしの連中のある日だった。河岸の問屋の人たちが、古馴染のかれのため、大挙して見物に来てくれる日だった。それを思うと安閑とは寝ていられなかった。——勿論一人としてそれに反対しないものはなかったが、かれは無理から起きて繃帯のまゝ舞台へ出た。そうしていつもよりもつと冴えたところをかれはみせた。——それほど血気にみちたかれだった……

折った前歯は入歯によつて以前もと通りにすることが出来た。が、頬の傷はそうは行かなかつた。あとまで長く痕になつて残つた。——が、そうはいつてもそれによつて、その位な傷にはかえられないほどの徳をかれはした。河岸の連中のいまゝでより一層肩を入れるようになったのは勿論ひ延いて大根だいこ河岸がしだの多たち町ちょうだの、お

よそ由良を最負にするそうしたさかり場からとも／＼幕だの幟のぼりだのがかれへまで来るようになり、同時にそれ以来、由良一座のタテ師としてかれは厚遇されるにいたった。

が、かれの人気のそうした風にたかまって来たのも、畢竟はそれは、由良の、由良一座の人気の日にましだん／＼たかまって来たのによつてだった。倭とわかれたあとの二三年は、もと／＼無理な旗拵だったゞけ、色々さまたげもあれば困難も伴った。一芝居は一芝居と蓋をあけるに先立ってまず金の工面をしてかゝらなければならなかった。小屋でも、本所だの深川だの浅草だの、小劇場、でなければ、腐った、何をかけても客の来ないまゝ誰もかまい手のないようなぼろ小屋、そうしたところであればその一

座の体を入れることの出来るところはなかった。由良はそうした小屋から小屋を転々した。——その間で、倭のほうは、幾たびか歌舞伎座の檜舞台に成功したあと、座員をつれて息抜に洋行したり、小さいながら東京の真ん中に自分の持小屋を建てたりして並びない全盛をみせていた。

が、一たび由良の人気をえたあとはその全盛に拮抗するくらい何のわけもないことだった。間もなく、由良は、日本橋中洲なかずの芝居の太夫元と結んでそこを自分の定小屋じょうごやにした。——そのときには、座員でも、人数からいつて旗拳のときの三四倍になっていたばかりでなく、筑紫だの、志摩だの、白川だのという一流どの巧い役者、綺麗な役者、達者なしっかりした役者が由良をたす

けて側にいた。それには当初からの座員でも、ネツい、やかましい師匠のしつけの下に見違えるほどみんな上手になつていた。そうして大部屋のものでもみんな素直で熱心だった。——それよりも一番強いことは舞台に美しい統一のあることだった……

六

かれが外の二人と一しよに由良の「三羽鳥」と呼ばれたのもそのころだった。——外の二人とは、一人は「敵かたきやく役」で売つた菱川、一人はかれと同じ三枚目。……といつても、かれにくらべれば芸の幅がやゝ広く、ときには実じつてい体な爺さん役なんぞも

器用にこなす鷺尾だった。ともに横浜以来の、古い、生はえぬ抜きぬの座員だったには違いないが、菱川だけは、そのまえ倭の一座にいて身分でも由良とそれほど違わなかった。平ひらの座員としてカナリ重用されていた。……といういゝ証拠は、はじめてかれが、西巻が、臨時雇募集の広告をみて浅草座の茶屋へ倭をたずねたとき倭の代理として若い男が出て来た。そうしてかれのそのときして行つた拵えについて注意した。——その若い男が菱川だった……

が、菱川は、かれとはまた違つた意味で如才なかつた。倭と離れて由良の手に附いた当時は、勿論、だから、由良君、由良君と、呼ぶにしても君づけだったが、だんく由良が時をえて来るにつれ、いつかそれが由良さんになり座長になり、いよく「中洲」

の芝居へ根を下ろすとなったその前後には、完全にもう旦那、旦那……面とむかつてさえちやんとそう呼んでいた。——由良は弟子たちに、いつのころから「先生」と呼ばせず、つねにそう

「旦那」と呼ばせていたのである……

だからそうしたそもくを知らないものは、だれも菱川を、かれだの鷲尾だのと同じおんこ譜代。——大ぜいいる弟子たちのなかで特別ゆかりの深いものと思っていた。——そう思つて勝手に「三羽鳥」の一人にした。——いつそそれを喜んだ菱川は、それからというもの、一層それまでより羽を伸ばし、ほう／＼由良の鼻負さき……兜町だの、木場だの、土木のほうだの、客さきを縦横に飛びまわった。

かれにするとそれが面白くなかった。面白くないというよりもつとすゝんで苦々しかつた。さらにすゝんで不平だつた。機会のあるごとに、かれは、そのいわれないことをだれを掴えても話した。が、それを聞いて、しんじつ眉をひそめるものよりも、手を打つて「其奴そいつアいゝ」と喜ぶものゝほうが多かつた。

「当世だ。——それが当世だ。——器用にそう立廻る奴のほうがいまの世の中じやア勝利をえるんだ。」

実際そうだつた。如才ないといつても大根おおねでかれのような正直なもの……まえに「かれとはまた違つた意味で」と菱川について特にそういった所以である……つねに菱川にけじめを喰つた。番毎菱川に先手を打たれた。たとえば一しよに客の座敷に呼ばれ

たとしても、飲む、唄う、踊る、一人でその場を切廻し、一人でその場をさらって行くのが菱川だった。役者になるまえ大阪でしばらく落語家はなしかをしていたというわさにうそはなく、全く菱川は多芸だった。そうして「座敷をもつ」といった一切のそうしたことに妙をえていた。それにはそういう場合、舞台の役どこの「敵かたきやく」ということが飛んだかえって愛嬌になった。

そうした、その、惨めなけじめをくわないためには、後手にまわらないためには、かれとして飲んだくれるより外に方法はなかった。たゞもう出鱈目にそうするより外はなかった。そうでもしなければ恰好がつかなかった……

「止せよ、おい、そんな無理に飲むなよ。」

「仙人」という綽名をもった鷲尾は……もう一人の三羽鳥はつねにそれを心配した。——が、世間ではそうしたかれをもつていつか金箔附の酒のみにしてしまった。

七

そのあと二十年。——そのあとの二十年はかれにとって、空な、^{くう}夢のような月日だった。いえば、その「中洲」時代がかれの役者としての峠、上り切るところまで上り切ったときだった。そのあとの二十年で、それまでの十年にそこまで辛苦して経上^{へのぼ}ったところからつまりはそろく下りかけた。……といっても自分には毛

頭そのつもりはなかった……決してかれみずからそうは思わなかった。——なればこそ、空な、夢のような月日という所以の、はつきりいつてあとのその二十年には、橋の上から盤台を抛込んだようなことも、日の出の勢いの倭一座を捨て、無人ぶにんのみるかげもない由良一座に馳せさんじたようなことも、イルカ飛をとびそこなつて一生残るほどの怪我をしたようなことも、そうした生きのいゝ、ふん切つた、花々しい感じのことは一つもなかった。タテ師として、三枚目として、愛嬌ものとして、古参として、世話焼として、三羽鳥の一人として、飲んだくれとして、たゞそれだけの存在として、由良一座の、いよく以てむかしとはかわつて来た大ぜいの座員のなかにかれは残された。——残念ながら、か

れの名声は、とめどなく伸びて行く由良の、由良一座のそれに決して伴って行かなかつた。

……とめどなく伸びたといつて、また、由良の、由良一座のその名声は、その二十年の間に、到頭また「中洲」から東京の真ん中にその一座を乗出させ、歌舞伎座だの新富座だの、そのころあつた東京座だの、そうした大きなところを隈なく打たせ、それこそ満都の人気を一身にあつめさせた。——日露戦争のあとで、世間の景気もいわれなく上^{うわ}ずツていたが、一つには倭が、その興行師としての手腕をあまりにふるいすぎたあげく失脚したのと、一つには、團十郎菊五郎死後の、無残に中心をうしなつた歌舞伎の世界のいたずらに混沌をきわめていたのが由良にとつてもつけ

の幸いになつたには違ひないものゝ、なおそこに、由良のその生れだちからの嫌味のない、ネツい、慮おもんばかりの深い芸の力と、その一座のまえにいつたその舞台の上の美しい統一とが、いまゝで嫌いでそうした「書生芝居」をみなかつた人たちをさえ魅了するものがあつた。——それにはまた従来の、花柳界とか、花柳界を背景にしたそれ／＼のさかり場の客すじとかのたえざる後援のすさまじいものもそれにあづかつて力あつた。

その後、そのころ出来たある大きな演芸会社との契約が出来てその専属となり、嘗かつて倭一座の重鎮だった柳田だの藤川だの御園だのというたてもものとしよにしばらく芝居をしたが、そのうち柳田は死に、藤川は不治の病にかゝつて舞台を去り、御園は間も

なく生れ故郷の大阪へ帰って行つた。そうして天下は完全に由良のものとなつた。東京で「新派」……「書生芝居」だの「新演劇」だのという称呼はいまはもう返らぬむかしの夢になつたのである……といえ、由良一座にかぎることになつた。——とはいえ、そのときは、由良をたすけて功勞のあつた志摩も白川もその他の古い旗拳以来の生はえぬ抜きの座員は、そのほとんどすべてがすでに死んだりいなくなつたりしていた。そうして残つたのは、実に、筑紫と菱川とかれとの三人だけだつた。——鷺尾はそのずっとまえ思うところがあるといつて役者を止し、みれんげなく堅気になると一しよに、飄然去つて岡山の田舎へ帰つた。

八

が、立てるものは立て、押えるものは押える由良の律義さは以前とすこしもかわらなかつた。従つて菱川もかれも、身分だの給しんしよう

金しんだのは、若宮のような売出しの花形には及ばないまでも、

いえば新参の、吾妻や小倉たちのはるか上にあつた。——だから

菱川の、いたずらにメハリの強い大きな声さえ出せばいゝとする

「敵かたきやく役」がいかに「時代」で泥臭くつても、かれのつけた立

廻りの手の以前ほどうけなくなり、むかしながらに凝つてやるかれの仕出しのいかに思案にあたわないう時勢おくれの場当りをやるにいたつたといつても、そうした由良の天下になったとき、とに

かく菱川は万と声のかゝる金をこしらえ、「篋棒め、江戸っ子でえ」の、宵越の銭をもたないはずのかれにして、なお、八丁堀に格子づくりの、意気な、小ぢんまりした自分家じぶんいえをもつていた。

——が、そうなくてもかわらないのは菱川とかれの仲だった。——

——一度こじれた二人のあいだの交情はどこまでいってもむすぶれ解けなかった。

が、かれにとつては何のことでもなかった。かれにすると、むしろ、折合のつかないほうが勝手だった。義理を欠いてもそんな金をためる奴、金さえためればいゝという奴……そんな奴と一つにみられてたまるもんかとかれかれの肚だった。かりにも役者じやアないか、芸人じやアないか、芸術家じやアないか。——その

役者が、芸人が、芸術家が、うそにも判証文はんしょうもんをとつて金を貸す、高利貸の真似をする、……というのは、菱川、たのまれ、ば誰にでも、三十円、五十円、百円、ことゝしだいによれば三百円位まで、とるものをとつてつねに融通した。ちゃんくとさえして下されば、どうせ遊んでいるものですから、いつでもえゝ御用立します、こまる味はだれもおんなじです、といった調子だった。……そんな奴と、そんなあたじけない料簡の奴と一しよにされてたまるもんかというかれの存念だった。

が、そうはいっても在りようは、そのために、菱川のその片かたし稼業ようばいのために、どんなにみんな楽屋のものは助かったか知れなかつた。少々利息は高くつても、右から左、内輪ですぐにこと

の足りるほうが有難かった。だから楽屋うちの、かれと及び外の三四人を除いた以外のものは、そのほとんどすべてがそのおかけを蒙った。吾妻の如きその最もいゝお客で、とゞ終に公園へ身を売るにいたるまで、月々うけとる給金の半分は、手つかずいつも菱川の手へもって行かれた。——吾妻がいなくなつてからの後釜には三浦がすわつた。——で、楽屋では、その理由を以て菱川を「チヨコ銀」と呼んだ。チヨコとはそのうちみから「敵役」の柄の、でくく脂肪あぶらぶとりにふとつた大きな体を始終チヨコマカさせるからで、銀とはすなわち「銀行」の意味だった。

が、かれにとつて、菱川との間はそれでよくつても、由良との間はそれではいけなかつた。どうでもいゝですましてはいられな

かった。——というものが、年々だん／＼師匠との折合がつかなくなつて来た。……というほどのことはなくつても、その間に、へんにどこかたが籬のゆるんで来たような、ホゾの外れて来たようなかたちのあるのがかれに感じられて来た。十年まえ二十年まえのようにしつくりお互の間の呼吸いきの合い兼ねるものゝ出来て来たことがかれに感じられた。——震災後ことにそれがハッキリして来た……

九

「中洲」時代にはそういつてもよく失敗しくじった。飲みすぎて舞台を

トチツたり、喧嘩をして相手に怪我をさせたり、遊びに行つて出さなくつてもいゝボロを出したり、そんなことで始終かれは由良を失敗つた。いくら詫びを入れてもいつかな聞いてくれず、客さきへ泣きついてとも／＼口をきいてもらつたことも二度や三度ではなかつた。——が、その時分は、いくらそう失敗つても首尾をわるくしても、だからといつてその間に、木戸が立つの歪みが来るのといつたことは決してなかつた。むしろ逆に、失敗れば失敗るほど、首尾をわるくすればするほど、その都度かえつて親身な感じを深くすることが出来た。——だん／＼それが、一つにはとる年で、子供の大きくなつたのをみれば、以前のようなそんな馬鹿も出来ず、無鉄砲な真似もやれなくなつたには違いないもの

、それにしても以前のよう、用捨ようしやなく呼びつけてキメつける、頭からこなしつける。——そうしたこと……そうされることごとんとなくなつた。同時に舞台のことでも、以前のよう、に師匠、やかましくダメを出さなくなつた。ダメを出さないということは一面ほめもしないということだつた。訊きに行つてもハツキリしたことをいわなかつた。——そのくせ東京の真ん中へ乗出してと、いうもの、他の座員たちに対しては、以前より一層ネツく、以前より一層きびしく、すべてにわたつて巨密こみつに由良は指図した。——その指図をうけないのは、筑紫と、菱川と、かれとの三人だけだつた。——いえば別扱べつかくい。……そうした水臭い、他人がましい、情こわの強い師匠になつた……

そうなる自然、そこに芝居以外で顔を合せるといふこともなくなる勘定だった。神詣りとか、座敷とか、義理さばきとか、そうした色々な機会おりの供の中に欠けることも多くなれば、決してそのほうへは足を向けても寝なかつた今戸の本宅、……それは、由良の、横浜旗拳時代からの古い住居で、一ころかれは鷲尾と一しよに、そのころまだ独身だった由良をたすけて一年あまりそこに寝起し、煮炊のことから何やかや一切引受けてやったことさえある……そのほうへもだんく足が遠くなつた。盆とか、暮とか、正月とか、そうした折目切れ目以外には、これという用のない限り、ときたましか顔を出さなくなつた。顔を出してもどこか氣ぶツせいなので、由良のまえには長くいず、すぐ奥へ行つて御新造ごしんぞ

だのお嬢さんだの、まえに安気あんきな時間を送った。——御新造やお嬢さんはかれが最負さいふだった。

が、その後、御新造も亡れば、今戸のそのおもいでおもいでの深いうちも震災で、跡方なくなつた。——それ以来、由良は、今戸を捨て、今の矢の倉へ移つた。八丁堀と矢の倉だから、まえの今戸のことにすれば、すぐもう隣といつてもいゝ位の近所きんじよになつたのである。以前いぜんだつたら、毎日のように、それこそ喜んで常じようびツたりになつたに違ちがひない。……が、御新造のいなくなつたいまとなつては、たのむ木蔭きかげはお嬢さん一人。——以前にましていよく、かれの足は遠とほくなつた。

だから、今日の訪問は、実に夏なつこの以来かたの三四ヶ月ぶりである。

——いくら何んでもあんまり義理がわるすぎる、今日こそ一つ、しみ／＼あやまつてやれ、ことによつたら思うさま久しぶりに愚痴もこぼしてやれ……そう思つてかれは、その矢の倉の、半西洋の、手勝手のわるい、取ツつき悪い感じにくの玄関に立った。そうして景気よくまず呼鈴を鳴らした。——が、出て来たのは顔を知らない女中で、先生はお留守でございます……にべ膠もなくそういった。

「じゃアお嬢さんは？」

「お嬢さまもお留守でございます。」

「どこへおいでになった？」

「お嬢さまは今日はお寺詣りにおいでになりました。」

「と、おきたさんもないのか？」

「へえ、おいでになりません。」

おきたというのはむかしからいるお嬢さん附の古い女中である。この女中がいれば誰がいなくつても「まア西卷さん」と出て来てすぐ恰好をつけてくれる。——でなくつても、いゝえ、押していえば、書生でもしたおとこしゅ下男衆でもだれか話の分るものがあるに違いない。——が、そんなものに逢つたつて仕方がない。それより黙つて帰つたほうがいゝ。——ふいとなぜかそんな気がした。

「ぼくア西卷だ。——よろしく申してくれ。」

そういつてかれは、手に下げた小田原屋の漬物の樽……かれの歳暮の挨拶はいつもそれときまつていた……をそこへ置くと、そ

のまゝすぐ、その無愛想な女中をうしろに門の外へ出た。——で、一人寂しく矢の倉の河岸かしを両国のほうへあるいた。

十

「おや？」

急にかれは立留った。——その少しまえ、向島で、牛うしの御前ごぜんのまえで田代がそうしたように。——なぜならいまゝで展けていた河の光景けしき……あかるい河のうへの光景が急にそのときかれのまえに姿を消したから……

そこに、河岸から、棧橋でつながれた船料理。——いつみても

客のない、ガランとした……ことに寒い時分にあつて一層その
酷い……いえば手持無沙汰な感じに水の上をふさいでいる大きな
船のさまと、それへさそう無器用な門とのぼつねんとそこに突ッ
立っているのはむかしながらのけしきだが、そのあと、そこから
両国の袂の、一銭蒸汽の発着所のあるところまで、以前はそこに、
河の眺めを遮る何ものもなかつた。むしろ寂しい位おどかに往ゆ
来ききする船のすがたや、いそがしく波を蹴立て、行く蒸汽のさまや、
まんくと岸を浸してながれる青い水のひかりや、その水を掠め
て飛ぶ白い鷗のむれや……そうした光景があからさまに眼にうつ
ツた。——が、いつかそこには東京通船株式会社の、倉庫なり事
務所なり荷揚場なりの古トタンをぶつけた、大きな、うす汚いバ

ラックがいわれなく立ちはだかつていた。そうしてそのぐるりには、石油箱だのビール箱だの、石炭を入れる吠^{かます}だの、鶏を入れるような、大きな、平ツたい竹籠だの、およそ野蛮な、ぎツかけない、わびしい感じのするものが堆^{うずたか}くそこに積まれてあつた。——
縄切や菜っ葉の屑のごみく散乱^{ちらか}つた道の上に焚火している四人の人夫のむれも、そこから出るお台場行の汽船の大きな看板も……いえばそれも震災まえにはみられなかつたものである……その下にさがつた活動写真のビラも、折からの曇つた空、極^{ごく}月のその曇りぬいた空を、一層暗く、一層味気^{あじき}なく、一層身にしむものにするのに十分だつた。

「酷くなつたなア……」

自分に歎息するようにかれはいった。——矢つ張、田代が、長命寺の境内いしだたみの磔うのうえに立つてそういつたように。——が、田代の場合のは、あながちそれを田代の場合に限らない、小倉がいつでも三浦がいつてもいゝ台詞せりふだった。が、かれのこの場合のは、とくにそれがかれに限った感慨だった。——なぜなら、そのあたり、浜町河岸から矢の倉河岸へかけて、実にそこは「中洲」時代のかれのなつかしい「巢」だったからである。一晚といえどかれは俵をその河岸にとばさなかつたことはなかつたからである。芳町から柳橋へ、柳橋から芳町へ、役があがるとすぐかれは芝居を出、あるいは魚河岸の客に、あるいは兜町の鬘負に、あるいは木場の旦那に、呼上げられてはつねにその界限の有名な茶屋小屋：

：岡田だの、福井だの、かめせい亀清だの、柳光亭だの、深川亭だのに
始終もう入浸りになつていたのである……

かれは眼を転じて電車通りをみた。そこには広い道の上を電車
に交つて自動車と自転車とが目まぐるしく行交ゆきかつている。その間
を縫つてトラックが絶えずけたましましい地響をさせている。――
が、嘗ての日のあれほど矢のように飛交とびかつた俵の影は？ ……な
つかしい、馴染のふかいあの俵の影は……？

「変つたなア……」

じきにかれは歩き出した。――あてもなく一人寂しく両国のほ
うへかれはあるいた……

みぞれ

一

「で、どこへ行こう、こゝへ行こうのあげく向島へ……」

「とは、また、酷く拈ひねった……」

「というのが、いゝえ、その病氣見舞に行つたさきというのが吉野町。……毘沙門さまのすぐそばなんで帰りに山谷堀についてぶらくあるいているうち、どうだ、百花園へ行ってみねえか。――」

—小倉君がそういい出したんで……」

「と、あなたと、小倉さんと、それから三浦さんと……？」

「それだけで。——三人だけで。——とにかく小倉君という人は御存じの通りの風流人、——ごみくしたところよりしずかなところのほうが好きなんで。」

「いまの節^{せつ}では、しかし、百花園……？」

「何にもみるものはありやアいたしません。ほんとうの冬枯の、薄が枯れて立っているばかり。——人だつて、だから、一人も入っておりやアしません。」

「それには、一ころほど、百花園とあんまり人がいわなくなりましたから。」

「いわないのが当りまえ。——外ほかに行くところでもないように、あんな面白くもない、不自由ツたらしいところへ行く籠棒があるもんじやアござんせん。——しずかを通り越して、寂しい、心細い……しまいにはへんな気になりました。——三十分ばかりいて匆そ々外へ出ました。——で、小松島から蒸汽のりてに乗……つたのはいゝんですが、これがまた、勘定するほどしか乗客のりてがありません。ガランとしております。——窓のそとをみるとさむ／＼と……そういつてもさむ／＼” 水が流れています。」

「……………」

「いよく／＼以て心細くなつたという奴が、みんなその陰気なけしきに被けお圧されて口をきゝません。——さすがの三浦君でも無駄を

いいません。——吾妻橋に着いてやれうれしや……ほんとうにそう思いました。——一杯、とにかく一杯、そういつて蒸気を上るとすぐ、半分夢中で、いそいでこゝのうちへ駆けつけました。——で、威勢よく……ガラツと威勢よくおもてをあけると金平さん……そこに、ぼんやり、一人で金平さんがチビく／＼やっているじやアござんせんか。」

「と、では、はじめから西巻さんは御一緒……？」

「……じゃアなかつたんで。——ヒョツクリそうこゝで落合つたんで。」

「あゝ、それで……」

「お互に、おや？ ……ということになって、これ。——ちよう

どそう、あなたのいまいらつしやるところ、そこんとくに金平さんがいて、われ／＼三人そのまえに陣取りました。——で、さア四人でそれから飲みだしました。」

「と、もう、お三人のみえたときには、西巻さん、さきへあがつておいでだったんで？」

「二三本もう並んでおりました。——が、ちつともまだ酔ってありません。——酔っていないどころか妙にこれが沈んだ元氣のない顔をしております。」

「はて？」

「それが——それが、いゝえ、可笑しいんで——いかにもそれが金平さんらしい理由わけなんで……」

そういつて、その一人は、話にほぐれてしばらく閑却してあつた自分のまえの猪口ちよくを気のついたように取上げた。——その一人とはいうまでもなく田代要次郎。——もう一人の熱心な聞き手のほうは日本橋の「うたむら」という待合の主人である……

二

「その日、金平さんは、『矢の倉』の師匠のところへ歳暮に行った人なんで。」

すぐまた田代はいつた。「と、生憎、師匠も留守ならお嬢さんもいなかっただんで、そのまゝ玄関で引返し、河岸かしをぶら〜両

国のほうへあるいて行くうち、ふツと氣のついたのはこのごろす
っかり変つたあすこいらの光景^{けしき}。——あたくしなんぞでも、通る

たんび、変つたなアとしみ／＼＼思いますからあの人だつたらよ
けいそうだろうと思います。——早い話が一つ目へ行く渡しもな
くなれば四つ目の牡丹へ行く早船の看板もみえなくなり、以前^{むかし}の
ように暢気に釣なんぞしているものは一人だつてありません。——
——それには電車の通るのさえ可笑^{おか}しいほどしずかだつたあすこの
往來を、そういつてもしツきりなし、自動車だの自転車だのがや
けに通ります。——はじめてゞもみた光景のように、金平さん、
そのためトボンとしてしまつたらしいんで……」

「いゝえ、そういうこと、わたくしなんぞでもとき／＼ありま

す。始終みつけている光景でも、時の表裏で、いまさらのように、おや？——そう思つて狼狽あわて、眼をこすることがあります。」

「そのなかで、いゝえ、もう一つ金平さんのビツクリしたのは俤の通らないこと。——そんなにも自動車や自転車の通るなかで人力というものが一台も通りません。——空俤一つ通りません。」

「なるほど。」

「俤なんてものはなくなつてしまつたんだ、いつの間にか東京の往来から消えてしまつたんだ、だれももうそんなものを相手にするものはなくなつたんだ。……はツきりそうその証拠をみせつけられたような、何ともいえない心細い、いやアな気がしたというんですが……」

「西巻さんらしい。」

「そのまゝ電車通りを越して柳橋のほうへ入ったといひます。——義理にもすぐ電車に乗れない、とてもそのまんますぐうちへ帰れない……といったかたちの、そのトボンとした料簡で、代地だったら場所柄だ、一台位通るだろう。……そう思ったんだそうです。が、半チクな時間だったからか因果とやっぱり一台も通りません。——それにはすれ違げいしやう芸妓でも箱丁はこやでも一人として知つた顔がなく、一人として天下の西巻金平を問題にするものがあります。——みんな知らん顔でそばを通つて行きます。——これまで俺も売れなくなつたか？ おもわず立止つて溜息をついたといひます。」

「以前だったら通り切れるこつちやアありません。」

「真逆まさかそれほどでもないでしょうか……」

「以前、いゝえ、木場の福井さんという方がおいでになりましたね。——わたくしなんぞも御贖負になりましたが、この方が大した遊び手で、福井さんといえほどの花柳界でもそのころ知らないものはない位。……とりわけ柳橋がお好きで始終あの土地しまへ行つておいでゞした。——西卷さんはその方の大のお気に入り。

……お側そば去らずの恰好でしたから柳橋で西卷さんを知らなかつたらそれこそモグリ。——それはもう大した御威勢でした。」

「と、当人のいうことでもまんざら懸値の……?」

「いゝえ、それは。——それは、もう、その時分だったら知らな

いものでも先方さきから頭を下げて来ました。」

……年の市の昨日きのうにすぎた今日。——そうでなくつても一段落ついた感じに、このあたりどころもなくガランとうらさびしいのが当りまえのところへ、昨夜ゆうべからふり出した雨がみぞれさえまじえていまだに小止みなくふっている。——さすがに、だから、いつも繁昌のこの「菊の家」も二人の外にはだれも客がない……

三

「しかし、実際は……」すぐまた「うたむら」の主人は言葉を継いで「いつかはそれはそういうことになる、……そうなるときが

来るとはわたくしどもでもそう思っておりまして。が、こんなに早く、こうまで急にそうなるうとは。——わたくしどもにいたすと不思議……というよりは怖い気がいたします。」

「……………」

田代は、鯛チリの一豆腐をすくいかけた眼を相手のほうに向けた。

「いゝえ、俵。——おんなし人間を人間が乗つけて曳く。……いゝものじゃアござんせん、決していゝ凶のものじゃアござんせんが、わたくしどもの若い時分には外に何にもたよるものがなかった。

——鉄道馬車があり、円太郎馬車があったものゝ、いまの電車のように方々すみ／＼まで四通八達はしておりません。すこし遠

みちをしよとうとき、知らない土地へ行こうとうきよなと
き……そうとうきには嫌でもそれに乗らないわけにはまいりま
せん。——つまりわれく、その全盛のときに生れ合したんで、
よけいそれだけに無常を感じます。——西巻さんにしても矢つ張
それ。——あなたがたのようなお若い方から御覧になったら、い
え、どうでもいゝことゝしかお思ひになれないかも知れませんが
……」

「うたむら」の主人はわらつて猪口ちよくをふくんだ。

「いゝえ、あたくしたちにしたつて、それは。——矢つ張それは
春なんぞ、出を着た白襟の芸妓衆のそれに乗つて通るのを、いゝ
なア、綺麗だなアとうれしがつてまいつた玉ですから。」

「それさえこのごろは、新橋なんぞでは、三人と四人一しよだと
円タクで運んでもらう。——そのほうが手ツとり早くもあれば、
第一けいぎいに上るといいます。——なるほど、それは、そうす
れば俵くるまや夫にやる御祝儀だけで事が足りります。——あながちそれ
を悪口とばかりいつてしまえないというものは、いまの若い妓こた
ちは、俵へ乗るのをあんまりうれしがらないかたちがあります。
——春でも、ですから、出を着たつて以前のようにむき出しには
乗りません。ちゃんと、みんな幌をかけさせます。」

「一つにはしかし寒いんで……」

「いえ、御尤も……」

かるくそれを外そらして「うたむら」の主人は鍋……といつてもこ

のほうは鮫鱈鍋……のなかへ箸を入れた。——話が切れると、おもての油障子に、さら、さら、とふりかけるみぞれの音がしのびやかに聞えた。

田代は箸の尻を返して焔炉こんろの火を突ツついた。

「しかし、いゝえ、それは俵のことばかり申せません。」わらつてまた「うたむら」の主人は話を掻出かいだした。「震災まえまでさかつていたもので、こゝへ来て、この五六年でバタ／＼といけなくなつたものは外にもたくさんあります。——が、そのなかで、人のあんまり気のつかないもので、まるでその立つ瀬のなくなつた、あわれな、惨めな稼業があります。……お分りになりますか？」

「それは、どういう方面の？」

「いゝえ、あなたがたにもまんざら御縁のなくないもので……」

「と、それは？」

「そうなるのがほんとうの……そうならなくつちやアならなかつた稼業ですが……」

「さア？」

四

「芝居茶屋です。」

「………？」

「以前わたくしどものいたしておりました稼業……」 「うたむら」

の主人はもう一度わらって「俵のほうは、これ、東京でこそ相手にされなくなりまして。一足、東京の外へ出ればどうにかまだ露命はつないでおります。が、このほうは、どこにもそういう逃げみちがきません。——ペしやんこにされたらそれつきり、どうにも外に方返しがつきません。」

「なるほど。」

「いつかそういうことになる、そうなるときが必^{きつ}と来る、矢つ張そうは思っておりますが、真逆^{まさか}こんな早く、こうまで急にそうなるうとは。——思うと、矢つ張、夢のような気がいたします。」

「あたくしなんぞでも、それは、お茶屋さんのまえにずっとあの

花暖簾のかけわたしてあつた光景けしきを昨日きのうのように覚えております。

——二長町、久松町、新富町……芝居の好きなものは小屋のまえを通つたゞけでもぞく／＼したのですが……」

「高島屋さんが西洋から帰つていまゝでの芝居の仕来りを改良なさろうとなすつたのが明治四十一年。……一がいでかたに茶屋や出方を止そうとなすつてみごとおしくじりなすつた。——帝国劇場というものが出来て、茶屋も出方もつかわないうあたまで西洋式の切符制度ということをやつてみせたのが明治四十四年。……時間もこのときはじめて外の芝居のように昼間明るいうちからでなく夕方あける。——二長町の室田さん……興行界の大御所といわれたあの室田さんがそれを聞いて、結構だ、改良も。——が、それじゃ

ア、まだ、いまの芝居は立行かない。——そうおいしいなすったというものが芝居の一ばん大切だいじなお得意は花柳界……夜芝居じゃアその一ばんの大切なお得意さまに都合がわるい。——あの方にし
てそういう。……そんなときから、あなた、十五年にしかありません。」

「十五年……」

田代は感心したように首をふった。

「変りました。——実際この世界ばかりは変りました。」

「うたむら」の主人はしづかに銚子を取上げた。

「いま、しかし、芝居の一ばんのお得意さまを花柳界だなんぞと
いっただら……」

「酷い目にあいます。——そんなことをいつてるから時勢におくられるんだ。相手にされなくなるんだ。……目の玉のとび出るほど叱られます。」

「そこ。——そこなんで……」

「それについていゝ話。——あなた、遠州屋を御存じでおいでしよう?」

「えゝ、あの、清元のお上手な?」

「まあ、素人にしちやア。——あの男、わたくしどもの仲間でも、いまだに五代目ほどの役者はないと思つていたり、空也念仏の連中と附合つたり、芸げいしや妓しやに兄さんといわれて喜んだり、よほどその古風に出来上つております。——震災後、わたくしどもは

もう見切をつけて、外の稼業にそろ／＼取ツつこうと思案をして居る中で、遠州屋だけは強情に、仮りにも東京に茶屋のある芝居の一けん位ないつてことはない、そんなみツともない奴はない：：：そういつてしきりにそつちこつち此方運動をしてあるきました。いゝ加減金もつかった塩梅でした。——と、ある日、矢つ張その用で二長町の芝居へ行き、いつもの伝に仕切場：：：とはいいません、このごろじゃアどこでももう事務所：：：ずつとその事務所へ通ろうとすると、もし／＼どこへおいでになりますか？——いきなり女給さんに木戸を突かれたじゃアござんせんか。」

五

「だって、それは？」

「随分、いゝえ、分らない話。——が、あの男のこつてす、涼しい顔で、一寸、えゝ、事務所まで。——と、あなたさま、どなたでいらつしやいます？」

「どなた？」

「遠州屋ですよ、わたし。——そういつたらいかに相手が新米の女給さんでも分るだろう。……分らないまでも誰か分るものを連れて来るだろう。……そう思ったのが大へんな間違い、遠州屋さんてどちらの遠州屋さんでいらつしやいます？」

「戯談……」

「しみ／＼、遠州屋、あとで愚痴をこぼしました。——あんなり情なくって俺ア泪も出なかつた。——ほっしん発心して俺も君たちの真似をするよ。——たのまれたつてもう茶屋なんぞはじめるもんか。」

「それアそうです。——遠州屋さんのそう被おっしや仰るのは当りまえます。……いかに昨今の、ものを知らない相手だつて、仮りにも二長町でつかわれている人間が遠州屋さんを。……そんな無茶な、分らない……」

「と、わたくしどもでもそう思います。——が、一足しりぞいて考えるとそのほうがほんとう。——知らないほうがほんとうだという気がいたします。——つまりは西巻さんのいまの柳橋のお話

……それとおんなし道理だと思ひます。」

「旦那のようにそうあきらめておしまひになつちやア。——あたしくしなんぞ、まだ、そうなんだなア、そういう世の中になつたんだなアと思つても、いざとなると矢つ張そこにうぬぼれが首を出します。」

「それは、あなたは、お若くつておいでだから……」

「いゝえ、それが。——外のことじやアそうもうぬぼれもいたしませんが……」やゝ鼻白んだかたちにわらつて田代は料理場のほうをふり向いた。「下さいな、お銚子を。」

「ついでに此方へも……」と「うたむら」の主人もその尾について「お話が面白いもんでつい今日はいたゞきます。」

「折角、しかし、お一人で飲あがつておいでのところを。」

「いゝえ、こちらはもう相手ほしやおつたところ。——そちらこそ飛んだ御迷惑で……」

「いゝえ、あたくしはもう。——それよりぶちまけて一ついゝ機お会りだからあたくし旦那にうかゞいたいことがあります。」

「何ですか、しかし?」

「いゝえ、旦那なら。……きつと旦那ならハッキリいって下さるだろうと思うんで。」

「とてもそんなむずかしいことは……」

「いゝえ、やさしいことなんで。——『新派』っていうものはこのさきどうなりましょう?」

「……………？」

「それと『女おんながた形』ってものはこのさきどうなるんでしょう？」

「……………」

しばらくして「うたむら」の主人は口を開いた。「さア…………」

「お待ち遠さま。」

小女こおんなが、そのとき、田代と「うたむら」の主人の前へそれ／

＼熱い銚子を運んで来た。

六

「あたくしは、いゝえ、御存じの通りの暢気もの。——ついで、

そんなこと、思つてみたこともなければ、そばで誰が何といおうと平気なもんで、だからお前は後生ごしょうらく楽だの、苦勞を知らないふところ育ちだのと、小倉君や三浦君によくそういわれます。——
いくらしかしそういわれても『新派』つてものはどこまで行つても由良一座。
……新しい芝居だの剣劇だのがいくらさかつて来たつて、それはそれ、これはこれ、だからといつていまさら『新派』の土台の動くわけではないと思ひます。——それアあたくしだつて、行詰つたの、長い正月はないの、世間でいろ／＼キザなことをいうのも聞かぬ。見物だつて、それア、ときによると以前の半分も来ない。……どうしてだろう、こんなはずじゃアなかつたがと思う

ことだつて、この四五年たび／＼あるようになりました。——でも、それは、ものゝ流行はやりすたりはどんなものにだつてあります。

——いえばそれがあるから芝居だつてすゝんで行くんだと思います。」「

「それは、もう……」

「よく金平さんがいますけど、ずっと以前旧派の人たちが新派に押され、古いものばかりやっていたんじやアお客が来なくなつたんで、いまのあの歌右衛門さんや幸四郎さんが、『不ほととぎす如帰』
や『乳姉妹』をなすつたつてこと。——つまりはそれだつて、そういう旧派の芝居のうまく行かない時節にぶつかったからそんなことにもなつたんで、だからといって旧派がそれつきりになつて

しまやアいたしません。——それつきりになるどころか、いまじやア以前むかしよりもつとさかんになつて来ています。」

「それは、もう、それだけの価値ねうちのあるものでしたらそれつきりになんぞなるわけがありません。いつか、また、キツと時節がまわつて来ます。——でなかつたら、あなた……」

「そうでござんしよう。——ですから。——ですから、あたくし、先刻さつき申したうぬぼれの、うちのまず師匠、筑紫さん、汐見さん、もう一人、若宮君……」

「お世辞じやアござんせん、实际みなさん、しっかりした方ばかりです。」

「新しい芝居だの、剣劇だの……剣劇なんざアはじめツから問題

にはなりません。『芸』ってことの上で、この四人の足もとへでもよつつける役者が何人あります？ それだけの修行をしているものが何人ござんす？ ——旧派さんのなかにだってほんとは肩を並べることの出来る人たちは十人とはいないだろうとあなたくしは思います。」

「そ、それアもう……」こと／＼く「うたむら」の主人は同感のように「ことに若宮さん。——若いけれど、あの方。——あれだけの女形さんは旧派にだって……いゝえ、いまの旧派の女形の中にはとてもあんな方はおりません。」

「そういつて下さいますか？」

「それは、あなた、わたくしは大の若宮さん鼻負。——顔のあの

通りいゝ上、品があつて、色気があつて、何ともいえないしツとりした味があつて、することからいつたつて女優なんぞ……いまいる女優なんぞそれこそ足もとへもよれません。——女形の天才。——あゝ、いう方のいる間はまだく女形は……女形はどうだなんてことに、いゝえ、なりつこございませぬ。」

「それが——それが、その……」急に田代は遮るように「自分で、若宮君、女形をこのごろ嫌だといつておるんで……」

「女形を嫌だ？」

「ふつ／＼嫌だから止よしたい……」

「そ、それは、また……？」

かぶせて田代はいった。「ですから。——ですから、あたくし

……」

七

……と、そのとき、しずかに入口があいた。

「何をしているんだな、おい。」みるなり田代はキメつけるようにいった。「三筋町みすじまちからこゝまで何時間かゝれアいゝんだ？」

「お前のようなヒマ人じゃアないよ。」

入って来た小倉猛夫は、むツつりと、でも、「うたむら」の主人のほうへそれとないこなしをして、そういいながら田代のいるテーブルのほうへすゝんだ。

「でも、電話をかけたら、細君が出て来てすぐ行くといったじゃないか？」

「うるさいからそういわしたんだ。——雨の中を、何も、幾たびもそんな人のうちへ行ったり来たりさせるこたアない。」

しずくの垂れる傘を小^こ女^{おんな}の一人にわたすと、大きな体を田代のそばに割込ませ、すぐに小倉は手^て焙^{あぶ}りのかげに置かれたしながきを手もとに引寄せた。

「おい、君、御紹介しよう。——日本橋の『うたむら』さんの御主人……というよりはもとの二長町の……」

「分ってる。」田代のそういうのを押えて「御挨拶はしないが目にはよくかゝっている。——小倉です。」

いつそ無愛想に小倉は頭を下げた。

「いゝえ、わたくしも、舞台では始終……むかしまだ常盤座においでの時分からお目にかゝっております。」

それにこたえて「うたむら」の主人は愛想よく会釈した。

「舞台のまんまの、舞台もふだんもちツとも違わない、気のいゝ、ごく大味な……」

すぐ、また、田代のそばからそういいかけるのを「黙ってるよ、うるさい。——酔ってるのか、もう？」

「酔ってる。——すこしいま酔って来た。」

「だらしのねえ。——酔ってなんぞいるんなら来るんじやアなかつたんだ。——急な用だというから出て来てやったんだ。」

「さ、まあ、一つ……」田代はそれにはこたえず「酔ったって、そんな。——酔ったってちやんと、新派というものがこのさきどうなる、女形つてもものがこのさきどうなる？——旦那と、いまその研究をしているところだ。」

「ふん。」小倉はそれに乗らず小女に「姐ねえや、おい、わたしには蟹をくれ。」

「ですから。——ですから、あたくし……」田代はそのまゝ話をもどして「考えました。——考えました、あたくし……」

「しかし、それ？——またどうして若宮さんが、そんな？」

「うたむら」の主人は注意深く田代の顔をみた。

「女形つてもものは片輪なもの。——どうしたってそういわれるの

がほんとうのもの。——どうしたってこれからは女優……女の役は女がやらなくっちゃアいけない世の中が来ている……」

「でも、そういつても、その女優さんたちがみんな不味まずけりやア、これ……」

「喧嘩にならない。——だからそういいました、あたくしも。——と、それはいまゝでの見物……古くから芝居をみて来ているまゝでの見物だけのいうこつた。これからの、だんくゝ出て来るこれからの見物は決してそうみやアしない。——よし不味くつたつてこれからの見物にはそのほうがほんとうだ。いくらうまくつたつて女形は嘘だ。同時にまた何時いつどんな女優が……どんなに世間を驚かすような巧い女優が出て来ないつてことがどうしていえ

る？」

「なるほど……」

……運ばれた蟹の足をたんねんにむしりながら、小倉はそれにあずからず、しずかに一人、猪口のかずを重ねた。

八

「しかし。——しかし、この間の……」 「うたむら」の主人はな
お肯うべなえないように「この間の本郷の芝居の、悪い親おやき同胞ようだいをも
つたゝめに苦勞する若い芸妓。……あの役なんぞ、わたくし、し
み／＼巧いと思いました。何という好い味をもつてる方だろう

といまさらのように感心いたしました。——そう申しちゃア何ですが、わたくしどもが拝見しても脚本ほんとしたら随分悪い脚本……実みのない、辻つじ褻つまの合わない、いまだきどうしてこんな時代なものを由良さんがなさるだろう？ ……失礼ながらそう思った位でしたが、そのなかであの若宮さんの芸妓だけは、脚本を離れて、いかにもそうありそうな、無理のない……ことに、あの、しまいに気の違って来るところなんぞ、よくまアあれだけ、細かなしんみな芸がみせられる。……ほんとうに、わたくし、しみ／＼涙のこぼれるほどそう思いました。」

「いゝえ、あれは、若宮君のこのごろでの当り役。——楽屋でもみんなそういっておったんで、そのわりにあれの評判にならなか

ったのは全く狂言がわるかったから。……残念だったと思います
。」

「わたくしにいわせれば、うそもかくしもなく、新旧つつくるめ
たうえの今年中でのみもの。——そこまで、いゝえ、買いたいと
思つたくらいなもので……」

「そういつていたゞくとあたくしどもまで肩身の広いわけになり
ます。……けど、あれをやっている間でも、自分じゃア若宮君、
ちツともそれを喜んじやアおらないんで、そばで何かいうものが
あると、止よしてくれ、たのむからそんなこといわないでくれ。……
……此方こつちは、もう、いやで嫌でたまらないんだから。……何の因果
でこんな業さらしを……かゝなくつていゝ恥をかいてるんだか分

らないんだから。——そういつて、あなた……」

「……………」

「げんにいわれました、あたくしも。——あげまく揚幕へまわつてみて
いるといきなり入つて来て、何だ、要ちゃん、何をみているんだ
？——というから、おやじが是非みて置けとிட்டたからみてい
るんだ。——そういうと嫌な顔をして、そんなことをわざという
んだ、此方が捨てゝかゝつてるもんだからわざとそんなことをい
うんだ。——やつてる当人のつまらないものをみたつて面白いわ
けがない、そんなものをみたつてはじまらない、止し給え、止し
給え……………」

「……………」

「これが評判が悪いとか、人氣が落ちたとかいうなら氣を腐らすわけも分ります。そうでないんだだけこまります。——それだけ此方も。——いゝえ、いくら暢氣でも、これ……」

「お幾つです、若宮さん？」

ふいと「うたむら」の主人はいった。

「あたくしより三つ上ですから二で……」

「と、来年三十三……？」

「そうなります。」

「で、どこか悪い……ということもべつに？」

「えゝ、それは。——ほッそりしているわりには丈夫な方で……たゞとき／＼、どうかすると寝られない。——夜よく眠れない。

——そういつちやアよく、そのほうの薬を飲んでおるようですが……」

「あんまり、それは、詰めてものをお考えに……」

「そうなんで。——あんまりものを深く考えすぎるんで。——あんまり気を細かにつかいですぎるんで。——師匠もそれは始終心配しておるんですが。」

「役者なんてものはお天気のほうがいゝんだ。」

……と、そのとき、どう思ったか小倉が口を出した。

「お天気の？」

「そうよ、お前のようによ。」

おもむろに小倉は蟹で汚した指を拭いた。

九

「いや、これは、すっかりお饒舌しゃべりをしてしまつて……」

おもい出したようにそういつて「うたむら」の主人の立上つたのはそれから間もなくだった。

「お帰りですか？」

田代はやゝ名残の尽きないかたちになつた。

「でももう、あなた、四時になります。」 「うたむら」の主人はしまった時計をもう一度出して「今日は、実は、昼まえからうちを出ておりますんで。——区劃整理のことで田町の地主のところ

までまいったかえり、ふいと思いついて吉原の……御存じでしょう、お直婆さん？」

「え、知っておりますとも。——師匠の連中に始終来て下さいます。」

「あゝそうでした。あの婆さんはむかしから由良さん鼯負でした。」

「そうなんです。」

「久しく逢いませんし、どうしているかと思つて声をかけに一寸門かどまでよりました。——と、ちようど、二三日風邪をひいたといつて寝ておりましたが、まア上れ、まア一服のんで行けというのでこれが一時間ばかり。——体はわるくつてもいうことは元気で、

仲の町の茶屋の戸袋へれい／＼しく売家の札を貼ったといつて腹を立てたり、歌舞伎座から乗った自動車の運転手が山谷といった代々木かといつたといつて口惜しがったり、相手ほしやでいるところだからたまりません、それからそれ一人でそんなことを饒舌つて此方に口をきかせません。——やつこのことで逃げてまいたんですが、あのお婆さんなんぞも、これ、人力や芝居茶屋と一しよに消えてなくなる玉かも知れません。」

「吉原には、しかし、あゝいう方をいつまでも……」

「と被^{おっしや}仰るのはあなたが江戸っ子でおいでだから。——いまの

吉原はそんな国じゃアござんせん。」

「……………」

「これは、また……」「うたむら」の主人は機嫌よくわらって

「では、おさきへ……」

「これは失礼いたしました。」

「いずれ、また。——そのうちに春にでもなりましたら、一度ゆ

ツくり、おり機会をこしらえてみなさんにもお目にかゝりましょう。」

「有難うございます。」

「どうぞ由良さんによろしく。——では、小倉さん、御免を……」

「……………」

小倉はだまって頭を下げた。——小こ女おんなのこ拡ひろげて出す黒蛇の目

をうけとると、そのまゝ「うたむら」の主人は外へ出て行つた。

「あの大将、よく来るのか、こゝへ？」

小倉は銚子の代りをいいつけたあとでいった。

「うん、とき／＼来るらしい。」田代はうなずいて「あゝ、
見物が大ぜいいてくれるとちとらも心強いわけなんだが……」

「そうじゃアねえ。」小倉は眉をひそめるように「あゝ、
いう客ばかりたよりにしているからわるくかたまるばかりなんだ。」

「止せよ、そんな。——そんな憎まれ口は慶ちゃんにまかして置
けばいゝんだ。」田代は銚子を取つて「さア、ま、熱いのゝ来る
まで一つ行こう。」

「何だ、それより、急な用つていうのは？」

「いま話す。——話すから、もつと、——もつと何か喰べないか
？」

「酷く気前がいゝんだな？」

「いゝんだとも。——心得ているんだから、今日は……」

「大した景気だな。」

「景気だとも。——お金は小判というものをたアんともっておりまする、だ。」田代は全くの浮れ拍子に「姐ねえや、おい、熱いのを。——それと、なんでもいゝ、親方にそういつてうめえものを……」

十

小倉はだまってしばらく田代の顔をみていたが、

「帰けえらねえんだな、まだ？」

いきなり吐出すようにいった。

「何が？」

田代はキョトンとした顔をふり向けた。

「いゝえよ、帰らねえんだろう、この間ツから？」

「……………」

急に田代は声を上げてわらった。

「どうだ、そうだろうか？」

「さア来た、熱いのが……」田代はそれにこたえず、小女の銅壺どうこから出して来た銚子をうけとると小倉のまえの猪口と自分のまえの猪口とについだ。

「あれは十五日だから、十六、十七、十八、十九、——四日じゃ

アねえか、今日で？」小倉はいつそ憫むように「一しよか、三浦も？」

「一しよさ、みんな。」

「みんな一しよ？——と、西巻もか？」

「金平さんが先棒をふったんだ。——慶ちゃんだってあたしだってそんな料簡は毛頭なかつたんだ。」

「どうしたんだ、しかし？」小倉はもう一つ合点の行かないように「俺は、吾妻橋で、あすこですぐ西巻を自動車に乗せたものとはばかり思っていた。」

「そのつもりだったんだ。そうするつもりだったんだ。——ところが金平さん、どうしても聞かない。——どこかでもう一杯飲も

うっていうんだ。」

「随分飲んでいたじゃアねえか。——あれ以上西巻に飲めるわけがない。」

「でも、そういつて聞かないんだ。——面倒だから、じゃア、どこへでも行ってごまかせ、行きさえすれアそれで気がすむんだ。

……ということになって仲見世までまた引つ返した。——それがいけなかった。」

「……………」

「手ツとり早くと思つて洋食屋へ飛込んだ。——そこでまたうツかり五六本飲んだ。——と、今度は、慶ちゃんがガツクリ行つた。——あ、いけないと思つたときには此方の眼もいゝ加減ちらく

らしていた。」

「……………」

「さア、金平さん、すっかり喜んでしまった。——はじめの元気どこへやら、だ。——どツかへ行こう、こう巧く顔の合うつてことはないからどツかへ行こう。——何でもいゝ附合え。——何でもいゝから俺に附合え。——かゝることもやあらんかと、ちゃんとふだんから軍費は用意してあるんだと、腹巻からこれがぎくゝ札を掴み出す奴だ。」

「……………」

「で、行ったのは宮戸座の裏の待合。——まア先生しばらく……どうなすつたの、まア、その後は……といったけしきで金平さん

大した扱いだ。いよく恐悦の、すっかりこれがもて来い〜になつたところへ現れたのを誰だと思う？——昼間向島で逢つた

千代三郎の内儀さんだ。——驚いたよ、あたしア。——だって、君、あの女、千代三郎のまえは金平さんだつたらしいんだ。」

「……………」

「飲むんだ、また、これが猩しやうじやう々のように。——とうとう夜明の三時まで。——あくる日眼をさますと燈火あかりがついていた。——

金平さんは半病人のかたちで頭が上らない。——それを無理に、いまツから帰つたつてはじまらない、もう一晚飲もう、もう一晚

——で、あくる日になると苦しい、とてもうごけない……………」

「……………」

「で、とうとう四日というものぐずぐずにぶん流しの……」

「よく心細くなかったな？」

「ずけりと小倉はいった。」

「何が？」

「ふところがよ。」

「心細かったよ。——何としたって、君、慶ちゃんと二人の総財産金三円五十銭也だ。」

「知ってるからよ、それを。」

「いくら金平さんが心得ているにしたって、これ……」

「どうした、それで？」

「仕方がない、お詣りと称して外へ出の、チョコ銀へ駆けつけた

。

「チョコ銀へ？」

「いやな奴だけど、また、そういうときは調法だ。」

「どうした、そうしたら？」

「それが——それがまた不思議なことに。」田代は声を落して

「さアさとばかりいとも器用に。——そういつでも洩らずに……」

「出したか？」

「出したにも何にも。——大した御機嫌で入るならいくらでも持つて行け……とまでいわなかったが……」

「で、いくら借りた？」

「百円。」

「……………」

「で、まだ、そツくり半分残つてる。——入るなら貸すぜ。」

「誰が借りる、そんな金。」

「どうして？」

「お前、それを何の金と思うんだ。」

「何の金と？」

「そうよ。」

「……………?」

ふツと田代は小倉の顔を見た。——なぜならその小倉の言葉のなかにたゞならないものが感じられたから。——弁天山の鐘の音の落ちかゝるように響いて、戸外そとのみぞれをまじえた雨はいつか

雪になつていた……

冬至

一

……三浦と田代にわかれてうちへ帰ると一しよに西巻は病人になつてしまった。そのまゝずっと寝込んでしまった。——要は飲みすぎ……連日の暴飲がたゝつたには違いないが、一つには、そ

うでもしなれば家のものゝ手まえ恰好のつき兼ねるものがあつた。——實際、西巻は、女房のまえに、何とそのふしだら言訳をしていゝか分らなかつた。はつきりいつて女房や子供に合せる顔がなかつた。友だちとの附合。……そういうにしても四日は長すぎる……

「何だつて、俺は……」

たゞもうかれは悔まれた。思案すればするだけ自分のだらしなさがはつきりした。切上げかけてはもう少し。……器用に、じゃア、もう一杯飲んで。……いま帰つたつて明日あした帰つたつて帰る味はおんなしだ。……みすく早く引上げることの出来たものをそつういつて一日延しにのぼしたのは三浦でもなければ田代でもなか

った。——みんな自分……なかで一ばん年嵩の自分だった……

「酒なんぞ飲んでどこが面白いんだ。」

歎息するようにかれは自分にいった。——實際そうだった、實際かれには酒の有難さが分らなかつた。三十年来、酒といえれば西巻、飲むことゝいえば金平さん。——天下の酒飲みと人も許せば自分でも信じて来たものゝ……そう信じてめくら滅法飲みつゞけて来たものゝ、ほんとうに俺という奴は酒が好きなのかしら？

——とき／＼そうわれとわが胸ただに質してこたえにつまることがある。——でも、むかしは、すくなくもまだ五年まえまでは、好きだから飲むんじやアねえか、分り切った話じやアねえか。……苦もなくそういつて蹴散らすことも出来た。論より証拠この通り

と、そんなキザな、ろくでもないうたがいを晴らすため無理から
なお呷りあおつけることも出来た。——早い話が、この間でも、自分
からみればまだ子供のよな田代の、いかにもおろそかでなく、
いかにもたのしみそうに、いかにもうれしそうに、しずかにその
いち／＼の猪口ちやくを口へ運んで行くさまをみて、いまさらのように
自分の、飲みさえすればいゝといった工合の、たとえばさゝれた
猪口でもずん／＼そばからあけて行くいわれなさをわれながらつ
く／＼あさましいと思つた。——あげく誰よりもさきへつづれ
たかれだつた……

「止せよ、おい、そんなに無理に飲むなよ。」

むかし、よく、鷺尾にそういわれた。あの「仙人」はそういつ

てはよく介抱してくれた。あの男は、あの時分から、自分のほんとうの飲み手でないことをちゃんとそう知っていたのかも知れない……

「が、それにしても弱くなつたもんだ。」
歎息するようにまたかれは自分にいった……

二

酔うことは酔つた。酔うことはむかしだつてすぐ酔つた。もつといまより以前のほう^{むかし}が輪をかけてよけい酔つた。——が、酔つても、いくら酔つても正体をなくすということとはなかつた。——

どんなにべろくになつても行きつくところまでは必ず行きついた。——いかにへたばつてもいざとなればすぐ立直れた。——それの一ばんいゝ証拠はどんなに深く飲んだときでも、どんなに長くさをつゞけたときでも、決して人のように、そのあと体がつかえない。——そんなことは決してなかつた。「失敗しくじつたかな、此奴こいつ？」と、ときにそう感じられることがあつても、起きぬけにすぐ熱い湯に入り、ぐツと一つそのあとで熱い奴さえ引ツかければ、立たちどころ所に、奇妙な位立所にケロリとした。そうして、あと、いくらでもまたつゞけられた。——それほど怯めげないかれたつた……

「強つよいんだなア、金平さんは……」

大ていのものはそれをみたゞけで感心した。

「不死身なんだね。——つまりはそうなんだね、俺は。」

それに対して、かれは、そういつてはつねに頤あごを撫でた。そうしてそれを……誰もそれをほんとうに思った。

が、四十という声のかゝる前後からだん／＼その不死身があてにならなくなつて来た。そうして五十という声のいよ／＼聞えて来たとき、いつかかれは飲むとすぐ眠くなるくせがついていた。

文字通り前後不覚になるくせがついていた。ともすると二日酔の一日ですまず、ずっとそのあくる日まで持越すといった風なくせがついていた。——勿論そうなつては、熱い湯も、熱い奴も、却つてその苦患くげんをはつきりさせるばかり、決して以前のようないや

ちこな験げんをみせなかつた。そうしてその前後から、根こんがなくなり、のみこみが悪くなり、気にすべて張りがなくなり……身の衰えが急に押しして来た。側からやいゝいわれて医者にみせると腎臓に故障があるといわれた。いまのうち養生をしなければ……ということはいうまでもなく禁酒の勧告をされたのだった。

が、かれは肯うへなわなかつた。強情にかれはそのいわれなさを主張した。——が、たまくそのとき、一座のうちでかれにつぐ飲み手とされていた大部屋のある男が、ある日、突然血を吐いて倒れた。それが酒から来た胃潰瘍。——そうした不治のやまいのわざと聞いてひそかにかれは慄然とした。——即日かれは医者の勧告に従った。

「が、何だぜ、やまいが怖くつて俺ア酒を止めたんじやアねえんだぜ。——病煩いなんぞ俺ア氣にするんじやアねえぜ。——たゞ正坊が——正坊が可哀いから俺ア止めたんだ。——正坊が中学へへえ入るつていうのいつまで親父が……いつまでそんな親父が飲んだくれてばかりいられる？——それを思つて俺ア止めたんだ。」

かれは真面目な顔で負惜しみをいった。

が、その禁酒は三月とつゞかなかつた。いつともなしネジはもとへもどつていた。——すくなくもその正坊のめでたく中学の試験のうかつたとき、有頂天になつたかれは、すぐにその晩、仲間を大ぜい呼んで来て、たゞもう夢中にその晩一晚飲明したことだけはずかだつた……

「すっぱり、しかし、あのとき止めてしまっていたら？」死んだ子の年でとき／＼そう未練におもい返されることがあった。

「つまりは……つまりはそれもチョコの奴にのせられたんだ。——
—彼奴あいつにうまく嵌はめられたんだ。」

おもい返す都度、かれは、菱川をうらんだ。彼奴さえよけいなことをいわなかつたらとかれは口惜しがった。——よく止めた。よくおもい切って止めた、さすがは金平さんだと楽屋でみんなそういつてくれたのを……名物のなくなつたのはさびしいが、その

ほうが身のためだ、よくその気になったと無暗にそうものゝ善悪をいわない筑紫までがそういつてくれたのを、その中で、菱川だけ安く鼻であしらった。

「酒を飲まない西巻なんてものは気の抜けた風船だ。——役に立たねえってこれほど無駄なものはねえ。」

かげでそうせゝら笑つたと聞いてかれはカツとした。「よくも、畜生。」とかれは唇を噛んだ。そうでなくつても^{しほ}凋んでゆく……

そのため日にくゝ気の屈して来る、料簡のしゆんで来る、世の中のつまらなくなつて来る自分を心細くみ出しかけたかれである。

——かれにすると、だから、最も痛いところにそう触られたのである……

が、もし、それが筑紫なりだれなりの口から出たのだつたらそのは思わなかつたかも知れない。いつそ却つて有難いうれしい台詞にうけとつたかも知れない。「氣の抜けた風船……」かれのいかにも喜びそうな文句だつた。——が、菱川がいつたのでは……天下にかれの最も氣に食わない菱川のそういつたのでは金札でも鉄札……飲めばいゝんだらう、飲んだら不思議はねえんだらう。——ついでしてそう不貞腐れもいわざるをえなかつた……

「あいつ。——どこまでたゝるんだ、彼奴……」

と、いまさらのようにそのだらしなく酒を飲みはじめたそも／＼、……飲んだくれることを覚えたそも／＼。……そうでもしない限り、客の座敷で、始終菱川にけじめを喰い通しだつた二十年

まえのことがさびしくおもい出された。——と、そのおもいではまた、最近の、ついその一月まえの本郷の芝居の舞台での歪んだ互いの心もち。——二十二日の間、たゞの一日もその両方の呼吸のしっくりしなかつた不愉快さをさらにそこへさそい出した。

それはかれにとって久しぶりについた好い役だった。仕出し同然の端役はやくではあつたが眼につく役だった。演りようによつてはいくらでも儲けることの出来る役だった。いさんでかれは稽古に入つた。一つ久しぶりにと大反跳おおはずみにかれはずんだ。——が、その相手になる菱川は、たとえば正月の万歳の、かれの役を才蔵とすれば、当然片っ方は太夫のイキで行かなければいけないのをはじめから捨て、かゝつた。いくらかれが工夫してかゝつても決して

て菱川はそれに応じなかった。——それどころかわたす台詞さえまんどくにうけとらなかつた。——いくら此方がヤキモキしても相手は平気だつた。

で、結果は散々だつた。当然うけるべきものが根っからうけなかつた。うけないばかりでなくむしろ不評だつた。いつもかれに同情をもつ新聞の劇評にさえ「菱川、西巻、ともに当年のおもかげのないのは寂しい。」と、みごとに匙を投げられた。

「畜生。——菱川の畜生……」

かれは、うそもかくしもなく、その劇評を見て口惜し涙をこぼした。

四

……で、その五日ほどの間に、かれは、うそのようにげツそり
窶やつれた。どんな長煩いでもしたあとのように自分にもそうトボン
と感じられた。それほど、かれは、その寝ている間、身もこゝろ
もいためつゞけた。わけもなくかれは、寂しく、味気あじきなかつた。
奈落の底へでも落ちたように心細かつた。どこを向いても、くら
がりの、光りというものゝさして来ない、とりつき端のない感じ
のなかについぞいまゝで洒落にも思つたことのない一生……大切だいじ
なその二度と返らない人の一生……そうしたことがいまさらのよ
うに果敢はかなくふり返られたりした。

「馬鹿だなア、俺は……」

強いてかれは自分にいった。——勇気を出してわらおうとした。
——が、駄目だった。——笑えなかった。——逆に、眼の中に、
なぜとも知れない涙が浮んで来た……

「年だ。——つまりは年だ……」

そう思うと、泪のひまに、女房や子供の……自分だけをたよりにする女房や子供のいとしいすがたが眼さきに浮んだ。

「が、もしものことがあつたら？——俺に、いま、もしものことがあつたら？」

不意にかれはうしろから羽交^{はが}じめにされた。——いそいでかれはふりほどこうとした。——が、それは、かれの自分でつけた立

廻りの手のように器用にそうは行かなかつた。——ずる／＼とそのまゝ惨めにかれは引戻された。——どこまでも引きずられた：
：

「止める。——今度こそきツと止める。」かれはふかく誓つた。

「誰が何といったつて——誰が何といったつて今度はきツと止める……」

……が、急に、……急にそうかれのこと／＼く気落のしたのは、からきしいくじのなくなったのは、一つには、今度のふしだらについての女房の仕向しむけのあんに相違するものがあつたからだつた。三日も四日もだまつてうちをあけた亭主に対する女房の仕打と思えないものがあつたからだつた。——そういつてもかれは、

優しく、機嫌よくうけとられた。——そういつてもかれは、容易に、無事に、安穩にわが家の鬨しきいをまたぐことが出来た。嶮しく青褪めた顔、冷かな氷のような言葉、邪慳な鋭い針をもったとりなし。……武者ぶりつき、噛みつく代りのそうした筈しもとをその身に決して感じなかつたのだ……

いえばかれは拍子拔がした。

……かれは、すぐ、言葉すくなにいいつけて床を取らせた。言葉すくなにいいつけて葉を持って来させた。——帯を解くなり吉原つなぎの羽二重の長襦袢のまんまかれはころがるように横になった。

「苦しいんですか？」

「うん。」

「お医者さまを呼びましようか？」

「うん。」

いそいでかの女は枕許を立つて行つた。

「すまねえ。——すまなかつた……」

かの女の足音の階子段の下へ消えて行くのを聞きながら搔卷かいまきのかげで密にかれはこういつた。——柳橋で稼しょうばい業いしていた時分のかの女のすがたがはつきりかれのまえに返つて来た。——おもえば苦勞し合つた仲である……

ちようどその、「菊の家」で田代が鯛チリの鍋をひかえて一杯はじめた時分。——八丁堀の空にも雨はふっていた。……みぞれ

をまじえたその雨がかれの耳にも冷々と音を立てゝいた……

五

が、あの日のビショ／＼したけしきに引替えて何という今日は馬鹿な天気だろう。真つ青に晴れた空、うら／＼とした明るい日影。……おかげで料簡がカラツとする。——かれは床の上を離れて窓のそばに立った。そうしてみるともなく外の光景……バラツクの屋根とラジオのアンテナとの錯綜のかぎりなく打続いた光景……でも、それは、かれの二十何年というものそこに住みつゞけた馴染のふかい町々のうえをみ渡した。大通りからやゝはずれた

新みちのなかだから電車の音も響いて来ない、自動車の音も聞えない。……しずかに晴れたその青空の下に、そのとき、一文獅子いちもんじしの太鼓の音が遠くさびしくたゞよっていた。

かれは窓を閉めて床のうえに返った。いそいでかれは手を叩いた。——返事がないとみると「おます、おます……」とかぶせてまた大きな声で呼んだ。

「御用で？」

唐紙をあけて顔を出したのは書生の西崎だった。

「おますはいねえのか？」

「一寸いま買物にお出かけになりました。」

「正ちゃんはどうした？」

「先刻^{さつぎ}学校のお友だちのところへ行くといっておでかけになりました。」

「と、誰もいねえのか、階^{した}下に？」

「へえ。」

「何時だ、いま？」

「もう少しまえに三時をうちました。」

「三時を？」

「へえ。」

「湯に行くからすぐ支度しねえ。」

ふいとかれはこういつて寝巻——長襦袢は、あの晩、医者の方
たあとですぐ脱いだ——のヒラグケをしめ直した。

「へえ？」

西崎は自分の耳を疑うように訊きかえした。

「湯に行くから石^{シヤボン}鱒や何か階下へ出しときねえ。」

「しかし……？」

「早くしねえ、早く……」

西崎の何かいいかけるのを押えるようにかれは立上った。枕許のお召の丹前を取って寝巻の上に引ツかけた。——それをみると西崎は狼^{あわ}狽^わて、階下へ下りて行つた……

かれは手拭を下げて外へ出た。あらためてその真つ青に……青く冷めたく水のようにそういつても美しく晴れた空をみ上げた。

……と一しよに、かれは、いつの間にかそのあたりの、眼に触れ

るすべてのものゝいそがしくすでに年の暮の粧いをしているのに気がついた。——おもいなしか往来をあるいている人たちでも浮足立って感じられた。——大通りにはすでに春を待つ笹の影さえつゞいていた。

「お湯ですか、先生？」

うしろからかれは声をかけられた。

「えゝ？」

ふり向くとそこに、近所の鰻屋の、芝居の好きな出前持が立っていた。

「おう、金公……」かれは愛想あいそよく「どうだ、いそがしいか？」

「だめですよ、もう、こゝへ来ちゃア。」

「だめだ？ —— 生意気いっていやアがる。」

「生意気じゃアありません、ほんとうですよ。」

「そうだ、ちようど好かつた。」ふいとかれは思いついたように
「あんまり荒くないところを三人前に、どんぶりを一つ、あとで
家へとゞけてくれ。」

「荒くないところを三人前にどんぶりを一つ？」

「そうだ。」

「かしこまりました。」

出前持にわかれて間もなくかれは湯屋のまえに立った。

「『今日ゆずゆ柚湯』 —— そうか、今日は冬至か？」

つぶやくようにいってかれは入口の戸をあけた。

六

……日の短い頂上である、ガタリと急に、わずかな間に、日かげも褪せ、空のいろも艶をうしなつた。——で、いつになくかれのおちついてゆツくり柚湯につかり、さばくした、生返つた……同時にやゝぐツたりした恰好で外へ出たとき、いつかもうあたりは、灯影ほかげの、濃く、しめやかに、眼立しく感じられる程度に……そのくせまだ空はさえ／＼とあかるく……たそがれていた。ほてる頬に触れる空氣のしずもりをたのしむように出来るだけかれはぶらくあるいた。

「まあ、お前さん……」

格子をあけてうちへ入るなりいきなりかれはおますにいわれた。
「いま西崎をみせにやろうと思つてたところじゃありませんか
」。

「どうして？」

「どうしてつてそうじゃありませんか。——わたしのいない留
守にだまつてお湯になんぞ……」

「そんなこといつたつていつ帰けえるか分らねえものを。——ぐず／＼
していたら日が暮れる。……でなくつても、みねえ、あの時分
に出たつてこのさまだ。」

「何もそう急に行かなくなつたつて。……行くなら行くようにお医

者にも訊いて、お医者がいゝといったらそれから……それからだつていゝじゃありませんか。——いゝえ、いゝじゃない、そうしなくつちやアいけないんですわ。——ほんとうに快くなつたのかどうか分らないんじやアありませんか、まだ?」

「快くなつたのよ。——すっかりもう快くなつたのよ。だから湯にも入へえつたんだ。」

「自分でそう勝手に決めたって。——もし、また、そんなかるはずみをしてぶり返しでもしたらどうするんです?」

「ぶり返すなんて、そんな。——そんな大したこつちやアねえんだ。——それほどの病人じやアねえんだ。」

「そんなら、じやア。——いゝえ、それだからいけないですよ、

あなたは。——お医者が何と叫びましたかと思ふんです。」

「医者か？」

「すこしはもう自分の体も思わないじゃア。——いつまでそう若くつておいでじゃアないんだから……」

「床上げをするんだ、床上げを。」おもわずヒヤリとしたかれは
そういつてそれをごまかした。「いま伊豆屋の出前持にそういつ
てやったから鰻が来る。——すぐに、だから、膳の仕度をしねえ
。」

そのまゝ、かれは、手拭と石^{シヤボン}鹼を西崎にわたして茶の間へ入
った。金^{こんじん}神さまのまえに一寸手を合せ、すぐに長火鉢のまえの、
友禅の大きな蒲団のうえにすわった。——たツびつに惜しげなく

ついで備長の匂があかるい燈火のなかにうごいていた。——かれは沸たぎった鉄瓶の湯を湯呑についでうまそうに一口飲んだ……

「唯今……」

そこへ正太郎が外から入って来た。「あ、起きたんですか、お父さん？」

「うん。」

「直ったんですか、もう？」

「直った。」

「大丈夫なんですか、ほんとに？」

「大丈夫だ、ほんとに。」

マントを脱ぎながら懸念そうに立った正太郎からかれは眼をそ

らした。——人こそ知らね、そらしたそのかれの眼にキラリとそ
のとき涙が光った……

七

間もなく長火鉢のそばにチャブ台がひろげられ、おますが西崎
を手伝わせ、そのうえにならべる夕食のしな／＼を広蓋にのせ
て運んで来た。——とも／＼、かれも、茶箆筒をあけて箸箱を
出したり、鉄瓶を下ろして茶を焙じる仕度をしたりした。

「あ、そいつ。——入らねえんだ、其奴……」

いつものように、おますは、最後に自分も火鉢のまえにすわっ

て、はる／＼嘗て大阪の鼻負からとゞけてよこした錫のちろりを銅壺のなかへしずめようとした。——それをみると狼狽あわてゝかれは……いそいでかれは押留めた……

「……………?」ふいにそういわれておますはかれの顔を見た。

「どうしてゝす?」

「飲まねえんだ。——飲まねえんだ、俺ア……」

「飲みたくないんですか?」

「そうじゃねえ、飲まねえんだ。」

「……………?」

「止めたんだ。——止めたんだ、俺ア。」

「急にまた……」おますはわらって構わずちろりをしずめた。

「駄目ですよ、そんなこといったって……」

「なぜ。——なぜだ？」

「止められやアしませんよ、いまさら。——いうだけ無駄ですよ、そんな……」

「どうして？ ——どうして無駄だ？ ——お前でも、先刻さつき、す

こしは体を思わねえじやア。……そ、そういったじやアねえか？」

「いいましたわ。——でも、それは、お酒のことをそういったんじやアありませんわ。」

「じやア何のことをいったんだ？」

「何のことってことはなく、いろいろ。——すこし調子に乗るとすぐ羽目はずすんですもの、あなたって人は。——それがいけ

ないんです。——すぐそうがむしやらになってしまふのがいけないっていうんです。——お酒だつて、うちで、一本なら一本、二本なら二本、定めてちゃんと飲む分にはちツともそんなかまやアしません。——薬になるつたつて毒になりつこありやアしないんですわ。」

「……じゃアねえ、そうじゃアねえ。」かれは固く執つて「どう間違つたつて薬にはならねえ。——毒だ。——しみ／＼分つたんだ、毒だつてことが。——一口飲めば一口だけ……すぐもうそれだけいけねえんだ、わりいんだ。……それアもうてきめん覲面だ。」

「でも、あなたのような人は……あなたのようないま、でお酒浸しになって来た人は、急にそう止めたりなんかすると却つてその

ほうがいけないんだっていいますわ。——そればかりでなく、お酒をたくさん飲んだ体は、お酒の気が切れると、いざどこが悪いとなつたつてそのまんまじやア薬だつて効かないっていいますわ。

「そんな……そんな馬鹿な。」かれは頭からわらつた。

「いゝえ、そうだつていいますわ。——お医者がそういいましたわ。——ねえ、正ちゃん。」おますは怯まず正太郎をふり返つて

「そういつたね、この間、山地さんが？」

「そういつた。」正太郎はハッキリうなずいて「お父さんは飲んだほうがいゝ。——飲まないとこのごろ元気がなくつていけない。」

「元気が？」そういう正太郎のほうをかれはみた。

「そうですよ、ほんとうに。」その尾についてやゝ詰る^{なじ}ようにおますはいった。「お酒を飲まないと、このごろ、へんに陰気な顔をして。——こまりますよ、いまツから……」

八

「そ、そんなこたアねえ。」

いそいでかれはそういった。——が、それと同時にかれは、い解くすべを知らない寂しさに身うちを引きしめられた。たとえば八幡^{やわた}の藪知らず……その藪の真つたぐなかの、どっちへ行つて

もふさがれた行くてゝある。——ぼんやりそこに立ちすくむ外はなかつた……

「床上げだ。——床上げの祝だ。——じゃア、まア、今夜だけは特別だ。」すぐかれは猪口を取上げて「明日から——明日からきツと止める。」

おますは銅壺からちろりを出した。

「つきましたよ、お爛が……」それにこたえず、底へ手をあて、加減をみると、火鉢越しにはじめの一つだけ酌をした。

「ぎ、喰べねえ、正ちゃん。」そのまゝかれは猪口をふくみながら正太郎のほうを向いた。

「どツか前川へでも久しく行かねえから連れてつてやろうかと思

つたんだけれども、こつちが寝込んでしまったもんでそう行かなくなつた。——春になつたら連れて行く。——どこへでも好きなどころへ連れてつてやる。——だから、まア、今年はそれで負けといてくんねえ。」

「えゝ。」

そうこたえたゞけで正太郎は、すぐその蒲焼の蓋をあけて皿にそれをとり分けた。

「おます、お前も喰いねえ、正坊と一しよに。——冷めねえうちに早く喰いねえ。」

「えゝ、喰べます。」

「西崎、お前にも今度は心配をかけた。——だからお前にも御馳めえ

走してやる。……そのどんぶりをそつちへ持つてつて勝手に喰いねえ。」

「は……」

「あゝ、久しぶりで手めえの体になった気がする。——どこへ行つてもしかしわが家ほどいゝところはねえ。」

猪口を下に置くどぐツと一つえりをしごき、出来るだけかれは晴れやかにとりなしてみせた。

「それだけ矢つ張年をとつたんですね。」
わざとおますは冷かにいった。

「そうなんだ。——全くそうなんだ。」すぐかれはうなずいて
「一人でいるときにはさほどにも思わねえが、田代なんぞと一し

よになるとしみ／＼　／＼　そう思う。——ばか／＼しくってあいつらのすることなんぞみちやアいらねえ。——ほんとうだぜ。」

「だって、それは、あなたの田代さん位の時分を思ったら……」

「そうじゃアねえ、そんなことをいうんじゃアねえ。」いそいでかれは遮って「俺のいうのはだん／＼俺も年をとって来た、いま／＼でのようちよろツかなことはやつちやアいらねえ。いえぼそれだけの味を舞台にも持たせなくつちやアいけねえ。……そういうんだ、つまりは。——田代にも三浦にもそれをいった。田代も三浦もその通りだといった。——そこで一つさえ返つてもう一度こゝで西巻金平を売つてみると二人もそういうんだ。」

「と、矢つ張……?」

ふいとおますは言葉を挟んだ。

「えゝ？」ちろりを取上げようとした顔をかれは上げた。

「ほんとうなんですか、矢つ張、あの新聞は？」

「新聞？」かれは解^げせない顔をした。

「えゝ、この間の……」

「出ているのか、何か？」

「今度のことが、あなた……」

「今度のこと？——何だ、今度のことっていうのは？」

「いゝえ、今度の由良一座の解散した……若宮さん座頭ざがしらの一座

の新規に出来た……」

九

「何だつて？」思わずかれはおますの顔をみた。「由良一座が解散した？」

「えゝ。」

「で、若宮が座頭だ？」

「えゝ、若宮さんを座頭にしてあとはいまゝでの由良一座の重立った人でかためた一座が出来る。——で、ちゃんと、筑紫さんの名前も出ていれば神こうじろ代さんの名前も。——小倉さんの名前も、三浦さんの名前も、田代さんの名前も出ていました。」

「と、じゃア、俺の。——名前も……？」

「いゝえ、入っていません。」

「入ってねえ？」

「『矢の倉』の先生と、汐見さんと、あなたと三人の名前だけそのなかにはないんです。——だから、わたし……」

「菱川はあるのか？」

「ありました、ちゃんと。」

「……………」

「菱川さんの名前がなければ、これは、あなたと二人だけは矢張り『矢の倉』の先生のところに残る。——そう思いますわ。——けれど、菱川さんの名前の出ているのにあなただけ。——汐見さんは活動のほうへ行くんだというし……」

「そんなことも出ているのか？」

「えゝ、それは外のところに……」

「そ、そんな籠棒な……」急にかれは遮るようにいった。「何新聞だ、そんな。——あるか、その新聞？」

「あります。——とつてあります。」

「みせねえ。——持つて来てみせねえ。」

そういうと一しよにかれはちろりを取つて猪口のなかをみたした。そうしていそがしくそれを口へ運んだ。——と、そのとき烏い賊かの墨のようなものが急に身うちにひろがった……

そこにまだいた西崎が立つてすぐそれを持つて来た。

「どこへやった、眼鏡？」かれはいつもそこへ入れて置く火鉢の

抽斗を掻きまわした。

「入っているでしょう、そこに？」

「入ってねえ。」

「そんなことないでしょう？」

「……あつた。」すぐまた不機嫌にそういつて眼鏡を……みツともねえ、だらしがねえ、いまツからそんな外聞のわるいことが出来るものかと長い間強情を張りぬいたあと、とうとう負けてこの冬からかけ出した老眼鏡を出してかけ、いそがしくまたかれは新聞を取上げた。

……その通りだ。おますのいう通りだった。いよ／＼今度、長い間の縁が切れ、会社の手を離れて独立することになった新派は、

それを機会に従来の由良一座を解散し、新たにそこに若宮柳わかみやりゆう絮じよを盟主にした清新な一座の組織されるにいたったこと。――

そうする上には従来新派の癌とされていた諸種の情実だの因襲だのを根本から芟除せんじよすると同時に、この際、女形制度を廃して女優を活用すること。――それには関西のある若宮鬘負の金持がうしろ立になつて、来春匆々そうそう、東京の某大劇場で花々しく旗傘をするに決つたこと。……そうしたことを長々と書立てた大袈裟な特別記事だつた。

かれは日附をみた。十七日としてあつた。十七日といえば……十七日といえば二日目である。飲んだくれていた二日目である。……そんなことゝは夢にも知らずうじゃじゃけ放題うじゃじゃけ

ていた最中である。

十

が、それにしても三浦や田代はそれを知ってたのだろうか？

——知って、黙っていたのだろうか？ ……

会社と手が切れた。みんなもう会社をクビになった。……はじめの晩、そういえば、「菊の家」でもあとの洋食屋でもしきりに三浦はそうしたことをいつていた。——そんなことがあるもんか、そんな馬鹿なことがあるもんかと、田代と二人、意地になってそれをやり返した。昼間もいゝえ、向島で、小倉と三浦にそういわ

れて心細くなった。……田代はそういった。……何だ、金平さんも知らないのか、金平さんでも知らないことか？——そんなら安心だ、そんならえぼったもんだ、つまらないことをいって余計な心配をさせやアがる。——急にそう田代は気を強くした……

とすれば……してみれば田代は知らないんだ。知らないに違いないんだ。知って、そんな芝居の出来る男じゃアない。——そういえば三浦だつてそんな男じゃアない。——なるほど理窟はいう、筋はいう、にくまれ口はきく、が、三浦は、肚はごく綺麗なもんだ。菱川のような下手なすいのうばりじゃアない。——もし知つていれば、会社と縁が切れたとはツきりいつたくらいだ、そのうえのことだつてはツきりそういつたに違いない。——いわないの

は……それをいわないのは知らないからだ……

田代も知らない、三浦も知らない、小倉だつて知らない。……
その知らない三人の名前が出ている。——本^{ほんぎま}極りのように立派に出ている。——うそだ。——でたらめだ。——大与^{おおよた}太だ……

かれは投出すように新聞を下に置いた。鬱陶しそうに眼鏡を脱^とつて火鉢のねこいたの上に置いた。——が、そうは思つても……
うそだ、でたらめだ、大与太だ、そうは思つても先刻^{さつき}ひろがった身うちの烏賊の墨のようなものは決して退^ひいて行かなかつた。——あれほどあかるく晴れていた心の青空にいつか深く雲がまわり切つた。——一二時間まえのあの手拭を下げてのうくくと外へ出た自分、鰻屋の出前持に声をかけられて機嫌よく口をきいた自分、

柚湯のなかでのびくと手足を伸ばした自分……そうした、その、何にも知らない、いゝ気な、可哀想なおのれのすがたがいまさらのように惨めにおもい返された……

「若宮さんが、しかし……？」 さぐるようにおますはかれの顔を見た。

「……………」

だまってかれは冷えた猪口を取上げた。

「だれもそう側にいなくなつて……どうなさるんです、『矢の倉』の先生は？」

「そんなまだはつきりしたことじゃアねえんだ。——決つた話じやアねえんだ。」

にべもなく、かれの、はき出すようにそういったその言葉のかげに救うことの出来ない心弱さがありくかくれていた。——かれはちろりを取上げていそいでまた猪口を一ぱいにした。

「……が、だれがいなくなつたつて俺はいる。——俺だけはそばにいる。」

すぐに言葉を継いで半ば自分にいうようにかれはいつた。——と一しよにかれは目蓋のうらの熱くなるのを感じた。

「おい、つけてくれ、あとを……」

……遠く霜にひびく火の番の金棒の音。——更けることの早い冬の夜である。

むほん

一

……これよりさき「菊の家」で「お前めえ、それを何の金と思うんだ？」とだしぬけにそう小倉にいわれて驚いた田代は、そのあと、由良を捨て、若宮の独立する。……由良一座に代つて若宮一座というものが出来る。……そうした魂胆こんたんの、そうしたむほんの企ての着々運ばれていることを聞いてさらに一層おどろいた。――

しかもその若宮一座の顔づけのなかに自分も入っている、ちゃんともう自分の名前も一枚入っていると聞かされるに及んでいよゝかれはおどろいた。——驚いたというよりあつけにとられた。

「戯じよ、戯談じよだんだろう。——戯談だろう……」

それがくせの、たゞその「戯談だろう」をくり返すだけだった。「だって仕方がねえ、先方さきでそう決めているものを……」小倉はわざと冷かにいった。

「ちゃんともう新聞にまで出ているもんだ。」

「新聞にまで？」

西巻でも知らない位である、田代の知るわけがない……

「みねえのか、あれを？」

「みやしない。——そんなものみやしない。」

「迂闊な奴だ。」

「だって。——だって、それは。——たとえ新聞に出たって、それは。——乱暴な、——そんな乱暴な……」

「どうして乱暴だ？」

「そうじゃアないか、乱暴じゃアないか。……本人の承知もしないものを勝手にそう……先方ばかりそう……」

「しらねえことがあるもんか。——ちゃんともう承知しているんじゃないアねえか。」

「戯、戯談だろう。——そんなことがあれば……うそこにもそんなことがあれば君にだって慶ちゃんにだって相談するよ。……だま

つてそんな不人情な真似はしないよ。」

「そんなことをいつて、お前、^{めえ}手金まで取つたんじやアねえか。」

「手金まで？」

「そうじやアねえか。——しかも、お前、^{くれ}年尾の金で百円……」

「百円？」

「まだ残っているはずだ、半分……」

「な、なにをいやアがる。——それはチョコ銀に……」

「だから借りたんじやアねえか。——たしかにそうなんじやアねえか。」

「そうさ。——それはそうさ……」

「チョコがしかし、そんなあてのねえものを貸す風か？」

「あての？」

「みとめのつかねえ金を器用にそう出す奴か？」

「……………」

「だからいうんだ。——お前、それを、何の金だと思うんだ？」

「だってさ。」

「チヨコの仕事なんだ。——大体今度のその仕事っていうのが菱川信夫のさりやくなんだ。」

小倉はずけりとそういった。

が、田代は、にわかうべなにそれを肯うべなわなかつた。

「だってチヨコが？——可笑しいじやアないか、それは？」

「どうして？」

「それは、あのじゞい、慾張つちやアいる、こすツからくは出来ている。……随分、ふてえ、小癩しよつちゆうに障る、それこそ人の小股しよつちゆうをすくうようなことばかり始しよつちゆう終しよつちゆうしちやアいるが、もと／＼そんな悪党しよつちゆうじやアない。——そんな大それた真似しよつちゆうの出来る大だいびやく百びやくじやアない。」

「そうよ、大百だいひやくじやアない。……そんな大百だいひやくでないだけチヨロリ人しよつちゆうに乗せられる。——搔かいだ出だされ、ばすぐその気になる。」

「だって、そういったって、それじやア『矢の倉』の先生に弓を

引くもんじやアないか？」

「そうさ。」

「そんな——そんな義理を知らない……何年附いているんだ、先生のそばに？」

「うぬの命の鰐つばざわ際にやア主の首まで打つじやまで、だ。」

「えゝ？」

「いざとなれば先生より手めえのふところのほうが可愛いのよ。」

「しかしそれは……それは君だの慶ちゃんだのならいゝ。……いゝつてことはなくつてもまだ堪忍が出来る。——譜代じやアないんだから。——つまりは外様なんだから……」

「またはじめやアがった。」

「いゝえ、ほんとうに。——けどチョコはそうじゃアない。——それじゃア、チョコはすまない。——そんなことを金平さんに聞かせたらどんなに腹を立てるだろう？——でなくつてもあいつは薄情だ、不人情だ、先生、先生と前へ出ると匂へえつくばつていくせに、かげへまわると『矢の倉』の、由良君のと、いまゝで三十何年厄介になつて来たことを何とも思わねえ面つらをしやアがる。——あんな太ふてえ罰あたりはねえ。——始しよつちゆう 終 金平さんはそういうっているんだ。」

「だから、お前は引つ張つたつて西巻は引つ張らねえ。」

「と、誰を引つ張るんだ、一体？——新聞には誰とだれの名前が出ているんだ？」

「みんな出ている。」

「みんな？」

「汐見君と西巻を抜いたあとのものはみんな出ている。」

「神代君もか？」

「あの男は稼げさえすればどこへだつて行くんだ。」

「と、君も慶ちゃんもか？」

「御多分にはもれねえ。」

「そんなことをいったら、君。——それじゃア、君、由良一座はナシじゃアないか？」

「だから由良一座の代りに若宮一座が出来る。——はじめツからそういつてるじゃアねえか？」

「したら先生はどうするんだ？——『矢の倉』の先生はこのさき誰と芝居をするんだ？」

「誰も相手がねえのよ。」

「そ、そんな——そんな——そんなってことがあるものか。」

「俺にそういつたって仕方がねえ。」

「いやだ。——いやなこつた。——誰がそんな……」

「俺だつていやだ。」

「じゃアなぜ承知した。——いやなものをなぜ承知したんだ？

——あたしア知らない。——あたしやア何にも知らないんだ。——

——けど君は知ってるんじゃないか、それほどちゃんと事のしだいを知ってるんじゃないか？」

三

「誰が承知なんぞするものか。」

ずけりとまた小倉はいった。

「しない？」

「するものか。」

「だって、君。」田代は出鼻をいなされたかたち「どうして？」

「先方^{さき}だけで勝手にそうきめているんだ。」

「じゃアおんなしじゃアないか？——おんなしこつちやアない

か、あたしと？」

「でも、俺は、お前の^{めえ}のようにそんな手金なんぞ取つちやアいねえ。」

「返しやアいゝんだろう、返しやア……」

「うけとると思うのか、チヨコが？」

「うけとらなくつたつてうけとらせる。——此方^{こつち}はそんなつもりで借りたんじゃアないんだから。」

「そこがむここの思う壺だ。——先方^{むこう}からわぎく足を運んで、

もしうんといつてくれゝば、いまゝで御用立したものは綺麗にこゝで棒を引く。——まずそれがさし当つての御相談。……そういつて来る奴を、逆にそつちから、すみませんが一つ。……頭を下げてさきのふところへ飛込んだ奴だ。——チヨコにしたら、何のこ

とはねえ、喜んでくらしいついで来た……」

「そ、そんなことをいって行ったのか、君のところへは？」

「俺のところばかりじゃアない、ほう／＼その手で口説いてまわったんだ。」

「畜生！……そんなことこれッばかりもいやアがらない。」

「あたりまえさ、いわなくつてすむならいわないほうが利^り方^{かた}だ。」

「慶ちゃんそこへも行ったろうか？」

「行ったろうさ。——が、三浦のところへ行つて、矢つ張そういったかどうかは分らねえ。——ことによつたらいまゝでの奴の半分だけ負けるといったかも知れねえ。」

「そうだといって、しかし。……真^{まさ}逆^{さか}しかしチョコが、自分でこ

れ身しんしよ上しよをなげ出してかゝるんじやア……?」

「あたりめえよ。チヨコはたゞ儲けたい一心よ。どさくさ紛れの火事泥を稼ごうって奴よ。——だから種たね出しはちやんと外にいる。」

「誰だ? ——誰なんだ、それ?」

「承知してくれ、ぼといつてなか／＼いわねえ。わるく伏せている。それだけ臭いと俺はにらんでる。——新聞には関西のある若宮を最負の金持が尻押だとしてあるがどうせほんとうのこつちやアねえ。」

「誰だろう? ——どこから出た手だろう?」

「俺には分ってる。」

「誰だ？ ……誰だ、おい？」

「吾妻のいのちを縮めた奴だ。」

「吾妻のいのちを？」

「この間、向島をあるきながら話したことを忘れたか？」

「向島？ ——と、あゝ、公園の？」

「そうよ、楽天団の楽天坊主よ。」

「^{あいつ}彼奴、しかし？」

「地震でそのまんまになったたくらみがこゝへ来てまたさえ返つたのよ。——まえのときじり／＼と遠巻にして行こうとして失敗しくじつたから……それにはそのときとは時勢も違って来ているから、今度は一おもいに強引にひねろうとしているんだ。——^{しお}汐さきを

みてなんてことでなしにズバリとそうあたまから若宮一座というものを押し立て、しまおうとかゝっているんだ。——そうしてそれがポンと一つ図にあたったら、それをふみ台に、一気に今度は東京の興行界へ乗出そうという肚にたくみのこんたんなんだ。」

「どうして分る？」

「お前のようなふところ育ちじゃアねえ。」

「そんな、また……」

四

……そのあと、小倉は、その楽天坊主というものゝそもく田

舎廻りの旧役者だったこと、だが機をみるに敏なかれは「書生芝居」が流行るとみると書生役者、「活動写真」が流行るとみると弁士、「喜劇」が流行り出すとみると喜劇役者、転々としてつねにその所在を変えて来ていること、体は小さいが望みは大きく、一生旅廻りで朽ちる料簡のなかつたことは早くから浅草という土地に目をつけ、そこがまだ「奥山」だの「六区」だのと安く扱われ、玉乗だの、娘手踊だの、改良剣舞だの、かっぱれだの、見世物の軒を並べていた時代、勇敢にかれはその渦中に飛込んで、「楽天団」という看板を上げたこと。——はじめはだれからも相手にされず、幾度そこにいた、まれな羽目になったか知れなかつたもの、強情にもちこたえ、だん／＼客を呼ぶようになり、

十年後には「浅草」での押しもおされもしない人気ものになりました。——主としてしかもその成功がかれの興行師的の手腕（それは嘗て倭のもっていたような）によつてゝあつたこと。……そうしたことを事細かに話して聞かせた。——田代は黙つてそれを聞いていた。

が、田代は、その話のあいだにこと／＼くしおれ返つてしまつた。「うたむら」の主人を相手に饒舌しやべつていたはじめの元氣は跡方なく消え去つてしまつた。——ということは、一くぎりの話のついたとき、ちようどになつた銚子の代りをいいつけるせいもなく、飲みあましの冷え切つた猪口ちよくをながめたまゝぼんやり腕を組んでしまつた。——勿論酔いは疾とうのむかしさめていた。

で、勘定をして「菊の家」を出ると、無理に小倉を、わずかな間にもつた雪の中を松葉町の三浦のうちへつれて行った。が、三浦はいなかった。先刻^{さつき}一度かえつて来たがすぐまた出かけたということだった。どこへ行った、どっちのほうへ行った、何とかいって行かなかつたかと、しつツこく田代は、むかし千住^{こつ}で何年とかお職を張り通したという耳の遠い留守居のばアさんをつかまえて（というのは三浦は独身^{ひとり}ものだった）根ほり葉ほり訊いたが分らなかつた。——結句要領をえずに、田代は、ぼんやりまた外へ出た。

「帰^{けえ}るよ、俺は……」

合羽橋^{かっぱばし}まで来ると小倉はじゃけんに……すくなくも田代には

そう感じられた……いった。

「帰る？」

「帰れよ、お前も、いゝ加減に。——いつまでそんなほつつきあ
るいていることもねえじやアねえか。」

「けど……」

「すこしは内儀かみさんの身にもなってみろよ。」

そういわれると一溜りもなかつた。でなくても、先刻から、酔
いのさめるのと一しよにいゝ加減さどごゝろがついて来ている。

——いまゝでゞも、それは、二晩や三晩はざらにあけているから
……そうして、また、それを役者の附会、芸人としたらその位な
ことはあたりまえで、売れゝば売れるほどよけいうちを外にする。

……清元の師匠のむすめといつても、そこは堅気だけに、あくまでそう正直におもいこんでいる相手だから、五日あけようと十日あけようとそんなことは何でもない。——が、それだけに、そう音無しいだけに、いざとなると一ひとしお入不憫が加わる。——それは、そうする外はなくつて駆落をした十年まえも、ねがいが出つて一しよになり、それまで二人の間に立つて事毎に邪魔をした……無理な、意地のわるいことばかりしつづけた養母（いえば、かれの、震災の前後一年ほど、由良の許しをえて大阪へ行っていたのも、つまりはその人を満足させるだけのものを稼ぎだすためだつた）をおとし一昨年の春み送った十年あとのいまでもかれのかの女をおもいうえについてはいさゝかのそこに晴れくもりもない……

「じやア、また……」

ふんぎりをつけて田代はいった。

「明日でもまたやって来ねえ。」

小倉はしずかに眼鏡を光らした。

「どこへ？」

「俺のとこへよ。」

「うん。」

「キツと、留守に、菱川から何とかいって来ているに違え^{ちげ}ねえ。」

「あたしア嫌だ。——いやなこった。——何と行って来たつてあたしア断る。」

「断るにしても、しかし、下手なことをすると後腐れが面倒だ。」

——相手が相手だ。」

「けど、それは……」

「いゝえ、菱川ならかまわねえ。——が、もし、お前のうけとつたその金が楽天坊主から出てゝもいると、どうまた車を横に押し来ねえとも限らねえ。——それア、あの坊主、あんな太ッ腹のようにみせて、いざとなると執念深い、まむしのような奴だから……」

「……」

「用心にしくはねえ。——用心しといて間違いはねえ。——だから……」

「……」

「三浦もきつと来るだろう。——俺たちがいま二人侍で行ったと聞いたら……」

すぐに電車は来た。小倉はそれに乗った。——灯ともしごろのふりしきる雪の中にたちまちその電車のかげはみえなくなった……

五

そのあと、田代は、借りて来た「菊の家」の番傘をさして、一人とぼく公園のなかへまた入って行った。——代地の明治病院のそばまで帰るんだから、ほんとうなら一しよに小倉と、蔵前ゆ

きのその電車に乗るのがあたりまえだった。が、そうしなかつたのは、四日ぶりで逢うかの女のために、かの女の好きな名所焼のみやげを仲見世で買う必要があつたからだつた。——で、公園へ入ると、かれは池のふちを真つ直に仁王門のほうへあるいた。——とツぷりもう暮れ切つたなかに、ふみしだかれた雪みちの、——すじほそ／＼とつゞいているのと、両側の木立の、暗い梢をしずれて落ちる雪の音とがむやみにかれを寂しくさせた。

で、名所焼を買うと、今度はかれは一刻も早くうちへ帰りつきたくなつた。雷門を出るとすぐ茅町までかれは円タクに乗つた。

が、そうはいつても、やがてわが家のまえに立つたとき、今更のようにかれはしきい鬩の高いのを感じた。なぜなら降るからそうした

に違いない片戸ぎし。……格子に半分雨戸を入れた門口のさまが、そう思つてみるせいか、主人のいないうちの寂しさをはつきりかれに感じさせた。——長い旅からでも帰つて来たときのような心弱さが急にかれの胸もとにこみ上げた。

「おい……」

ことさらかれは勢いよく、しまりをしたその格子に手をかけた。

「はい。」

ものゝ響きに応ずるように返事が聞えた。——すぐに上り端と茶の間との間の唐紙があいてあかりのいろが暗い中に流れた。かの女は土間に下りてかきがねをはずした。

「お帰んなさいまし。」

そういうかの女の片頬に江戸ざくらのみじめに貼ってあるのを
かれはみ逃さなかった。

「どうかしたのか？」

「えゝ？」

「いゝえ、頬ツペたよ。」

「えゝ、齒が……」

「痛いのか？」

「えゝ。」

「よッぽどか？」

「いゝえ、すこしなんです。——直ったんです、もう……」

が、そうはいつでも、昨日きのうあたり結い日だったのを無理にもた

せた銀杏返しのほつれが鬱陶しくそのうえに下っていた。

「あゝ冷めたい……」

そのまゝかれは、問わず語りにそういうと、傘と名所焼のつゝみをかの女にわたし、手袋を脱とつて濡れた靴の紐を解いた。

「誰か来なかつたか、留守に？」

座敷へ上るなりかれはいった。

「えゝ、もう少し先刻さつき、三浦さんがみえました。」

「三浦が？」

「えゝ、二時間ばかりまえ。——どこへ行つたらう、疾うに帰つてなければならぬんだが？——しきりにそういつてゝした。」

「で、何とかいつて行つたか？」

「いゝえ、じゃアまた来る、そういつてすぐお帰りになりました。」

「何にも外にいわなかったか？」

「いゝえ、何にも。——いつもと違ってなんだかむずかしい顔をしておいでゝしたわ。」

「ごたくが出来たんだ、ごたくが。——それでみんなほう／＼駆けずりまわっているんだ。」

「……………」

「昨夜^{ゆうべ}だって、一昨日^{おととい}の晩^{ばん}だって、ろくにこつちは寝てやアしない。」

「……………」

「外には誰も来なかつたか？」

「いゝえ、誰も。」

「昨日ぐらい菱川のところから誰か来やアしなかつたか？」

「いゝえ。」

「来なかつたか？」

「えゝ。」

「可笑しいな。」

「来るわけになつてはいるんですか？」

「なつてはいるんだ。」

そういうながら、かれは、上着のうちがくし內衣兜からふくさ袱紗にくるんだ

紙入を出して筆筒のうえに置いた。

そのなかの五十円……

何にも知らないかの女は炬燵のほうからかれの平生着ふだんぎをもつて来た。——そのかの女の肩をいきなりかれは引きよせた。

「寂しかったろう、おい……？」

犇ひしとばかりかれはかの女を抱きしめた。

六

あくる朝、起きぬけに……といつてももうそのときは十時をすでにすぎていたが、いそいで田代は三筋町の小倉のところへと家を出た。——雪は止んだが、空はまだ暗く陰気に、未練たらしく

灰いろに曇っていた。——時間のわりにつもりよりの早かった：
：ということは、それだけよけいに降り、それだけよけいにつも
った昨夜ゆうべの美しい銀世界のさまはすでになく、どこをみても沼の
ようなぬかるみの、しかも無慚に蹴返されふみかえされた泥の中
を、若い役者らしい見得もかぎりもなく、不恰好なゴムの長靴で
勇敢にかれはあるいて行つた。

途中、かれは、公衆電話で「矢の倉」の師匠のところへ電話を
かけた。女中が出て来て「先生は御旅行中でございます。」とい
った。ではお嬢さんかというと「お嬢さんも御一緒でございます
。」と木で鼻をくゝるすげないあいさつだった。かれは寂しい気
がした。……と同時に、まアよかった。——なぜかそういうほッ

とした気がした。

小倉の顔を見るとすぐかれはそれをいった。

「旅行中だ？」小倉は眉を擧^{しか}めるようにした。「で、どこへ行つたといった？」

「それは聞かなかつたが、お嬢さんと一しよというんだから、いつものまた修善寺へでも行つたんだらう。」

「何日行つたといった？」

「それも聞かなかつた。」

「何にもならないじやアねえか、それじやア。」

「だってあのこのごろ来た女中。——まるツきし分らないんだ、話が。——よッぽど慈姑^{くわい}のきんとんに出来上つているんだ。」

「この間お前の行ったときにはそんな話はなかったのか？」

「何の話もなかった。——だから急にでも行つたんじゃないかと思う。」

「うむ、そうかも知れない。」

「矢つ張、今度の話なんぞいろ／＼耳に入るんで。——こつちにいちやア、矢つ張、何かと面倒臭いんで……」

「そうだろう、おそらく。——が、そういえば、若宮もいま東京にいないんだ。」

「どうして？ ——可笑しいじゃアないか、それは？ ——誰に聞いたんだ、そんなこと？」

「昨夜三浦が行つて聞いて来たんだ。」

「三浦が？」

「昨日、三浦、西巻とお前にわかれて家へ帰ると菱川から手紙が来ている。二三度足を運んだがいつもいないからというんで寄越した手紙だ。——すぐ来いとしてあつたから行つてみると実はこれく……みんなもう承知しているこつたから否やはあるまいが」という高飛車な掛合だ。——万一、もし、不承知のようならいま、で貸した金を残らずこゝで綺麗にしてもらいたいといったそうだ。——が、あの男のこつた、逆にさきをくゞつて、いまゝでの奴を負けるとはいわない、それはそれとして、べつにこゝで改めて五百と六百とまとまつたものを都合してくれるなら身売をしてもいい。——その代りしんしょう身上の贅沢はいわない、どのみち何とか色は附

けてくれるんだろうから。——さきの出ようが出ようだから。こつちも構わねえ、高飛車に出てやったとそういつていた。」

「酷い奴だ。——だが、それじゃア君んとこへ来た話とは違うじやアないか？」

「人を見て矢つ張法を説くのよ。——で、三浦、いずれもう一度あうことにしてそこを出ると、すぐその足でお前のところへ行つた。——と、まだ帰つていねえ。——それならとことこのついでに浜町まで伸のして若宮のところへ行つた。……というのが菱川の話じゃアもう一つ腑に落ちないものがある。一度これはじかに当人にぶつかるこつた。——そう思ったのは矢つ張あの男だ。——さすがにすかさねえ。」

「で、行くと？」

「書生が一人留守居をしていて、先生は東京にいらつしやいませ
ん。」

七

田代にはしかし信じられなかった。留守をつかうんだ、それは……そうとしか思えなかった。——が、そうはいつでも、また、相手が相手である。やみく／＼そう留守をつかわれて、左様ですかとそのまゝ音無しく引下る三浦ではない。ことによると、これは、手筈のすべてと／＼のうまで、わざとどこかに身をかくしているの

かも知れない。——そうとすれば不思議はない……

「が、それは。」小倉はうなずかなかつた。「世間にまだこのとのぱつとしないうちなら、それは若宮のような神経の強い男のこつた、そうする必要もあつたらう。が、新聞にまであゝ麗々と出てしまつたいまとなつちやア、何もそんな卑怯に逃げかくれるこたアねえ。そんなことをしていたら一座の規模が立たねえ。」

「それは、しかし、チヨコと楽天坊主ですつかり取仕切つていれば……」

「それじゃア、いまゝでの、こつちの芝居とおんなしじゃアねえか。——何でもかんでも会社まかせの御無理御尤もにしていたいまゝでの由良一座とちツとも変らねえじゃアねえか。——そんな

ことなら、若宮。……そんな、いゝえ、ちよろツかなことだった
ら、あの男、どうしてはじめツからそんな話に乗るものか。——
あゝみえて、あの男、いざとなつたらテコでもうごくんじやアね
え。」

「とは思うけど……」

「さきへ行つてはいつでも、はじめの一月二月は諸事若宮のい
なりにするに違いない。——すくなくもそういう約束になつてい
るには違いない。」

「と、いよく立役たちやくで売るつもりかしら、若宮君？」

「そうだろう、大方。——女優を使うということが一つのまたう
りものになつているんだから。」

「だが、そんなことをいって、若宮君の相手の出来るような女優がどこにいるんだ？」

「どこにだっている。『楽天団』の中にだけだって十人や二十人はいる。」

「あんな——あんなもの……」

「と思うのはお前のような奴ばかりだ。世間じゃアそうは思わねえ。——よくしたもんだ。」

「だって、君……」

「とにかく『矢の倉』の一座にいた分には嫌でもいつまで女形でいなくつちやアならない。いくらそれじゃア当人が伸のそうと思つたって伸せない。今度の独立の動機というものもいえばそこにあ

る。——實際あゝいう好い役者を、いくら自分の仕立てたものだからといっていつまで『矢の倉』が手許に引きつけて置くつてことはない。——菱川でも俺のところへ来ちやア仔細らしくしきりにそういつたもんだ。」

「いえ、それは。——それはその通りだ。——あたしア、若宮君のような、あゝいう人こそ天才というんだろうと思つている。——だからあたしア同情する。——だから、自分から、たとえあの人『矢の倉』の手を離れたからつて義理を知らないとも恩を知らないとも決してあたしア思わない。」

「そんならことのついでに行つてやつたらいゝじやアねえか。」

「いやだ、それア嫌だ。」

「どうして？」

「そもくのイキが気に入らない。人をペテンにかけるような、そんな。——第一チョコなんぞの中へ入ってるのが間違っている。あんな奴の出て来るって法はない。——何が分るんだ、あんな奴に？」

「そんなことをいったって仕方がねえ。」

「いゝえ、これがもし、若宮君直接じかの話で、『矢の倉』のまえにもちやんと持出せる話なら喜んであたしア加勢する。——一年でも二年でもちやんと暇をもらって助けすに行く……」

「そんなこと思うか、お前でも？」

「あたしだって若いんだ、何かしたいよ。」

「『矢の倉』と心中するのは嫌か？」

「ほんとういえば嫌だ。——いまのようなあんな、引つ込思案の、大事ばかりとつている、料簡のぐずぐずな『矢の倉』と心中するのは嫌だ。」

「以前はあゝじやアなかつたんだが。」

「だから——だからいうんだ、あたしア。——芸だつて、演^やる脚^ほ本^んだつて、むかしアだれより新しいといわれた人なんだ。」

「お前なんぞまでしかしそういうたア……」小倉はそれにはこたえず慥然としていった。「いよく由良一座もどうかしなくつちやアいけねえときが来た。」

八

……で、小倉も、三浦も、田代も、もう一度菱川から何とかいって来たところでおたがいの態度をはつきりさせよう、そういう合せてわざと音無しく待つことにした。——が、二日たつても三日たつても、何とも菱川からいって来なかった。——何の音沙汰もなかった……

「どうしたんだらう？ ——どうしたっていうんだらう？」
いっそしびれをきらしたかたち、田代は、おちつかない紛れ、その日も小倉のところを訪ねた。と、かれよりもさきに三浦が来ていた。三人、その日もまた一しよになった。

「はじめの話じゃア、明日にも顔よせをして、すぐにも稽古にかゝる。——だからすぐ返事をしろ。——大した勢いだつたが……」

小倉はわらつた。

「俺にも狂言まで決つてるようなことをいつてた。」三浦もその尾について「何をいやアがると思つたら案の条だ。」

「案の条つて何がさ？」田代はいつた。

「そうじゃアねえか。嵩かさにかゝつてそんな、ぐずく立派そんなことはほざいたつて、さアとなりやア矢つ張恰好がつかねえ。——

——今日は、お前、二十三日だよ。」

「そうさ。」

「春匆々そうそうあけるつて芝居をそんなことでどうするんだ。——第

一、小屋からしてまだはツきりしていねえんじやアねえか。」

「どこだろう、しかし、某大劇場っていうのは？」

「そんなこと真まにうける奴があるものか、大きな小屋は、春は、どこだつてもうみんな決っているんじやアねえか。」

「矢つ張、じやア、浅草かしら？」

「そうよ、浅草出演よ。——このごろのセリフの大衆的つて奴よ。
。」三浦は冷かに「あんな、人を喰つた、ふぎけた、小癩に障る
言草はねえ。」

「何が？」

「いゝえ、大衆的つて奴よ。——何でもお値段が安くつて、手ツ
とり早く、ごそくさいでさえあればいゝしろものよ。」

「けど、それよか、あきらめたんじやアないだろうか？」田代は話の^{より}緘をもどした。

「何を？」

「いゝえ、あたしたちを。——引つ張ろうとはしたものゝそこに何かの工合でも出来て、急に止しにしたんじやアないだろうか？」

「そうならしめたもんだ。——逆に因縁をつけてとツちめてやる。」

「どうして？」

「はじめに、勝手に、ことわりなしに名前をつかやアがったんだ。——そつちは景気になってよかつたらうがこつちはそのためどんなに迷惑したか知れねえ。——そのしらちは、どうつけてくれる

とそういつてよ。」

「君たちはそれでよくつてもあたしアそうは行かない。」

「どうして？」

「そうなれば、あたしア、借りたものを返さなくつちやアならぬい。」

「何だ、そんなことを怖がっているのか？」

「怖がつちやアいないさ。怖がつちやアいないが、そうしなかつたら、チヨコのこつたもの、どんなまた阿漕あこぎなことをいつて来るか知れない。」

「いつて来たつていゝじやアねえか。——打捨うっちゃつとけ、そんなこと……。」

「君じゃアないよ、そうは行かないよ。」

「感心だ。——わけえものはそれでなくちやアいけねえ。」

「おだてなくたつていゝ。」

「おだてやアしねえ。——が、それほど覚悟をきめているなら……というよりは、それほど氣前がいゝならどうせ手のついた金だ。まだ残つてるだろう、すこしは。——どこかへ連れて行きねえ、二人を。——『菊の家』でいゝから連れて行きねえ。——なア小倉……?」

「いゝだろう、それも。」ともに小倉もいった。

「戯じよ、戯じよ談だんだろう。」

田代はいそいでふところを押えた。……というのは、めずらし

くその日、荒い縞の、いかにも女形らしいお召の着附に、意気な、幅のやゝ狭い紺献^{こんけんじょう}上の帯をかれはしめていた……

「往生際のわるい。——骨は拾ってやるよ、二人が。」そういつて、すぐ、有無なく三浦は立ち上った。「さア、おい、早いところ出かけよう。」

……ちようど、それは、冬至の日の、時間にして西巻が湯に行く途中、鰻屋の出前持と機嫌よく立話をしていたと同じころだった。——刻限はよし、天気はよし、どのみち三人あつまればそのまんま恰好をつけずにわかれるわけがない。……田代にしても、そこはしまりのない東京育ちの、あらかじめそんなことになるだろうとは思っていたのである。——三浦のいう通りどうせ手のつ

いた金だ、足りないものだ、いざとなればまたどうにかなるだろう。——かれはくゝるつもりもなく多寡をくゝった……

「わるい友だちはもつもんじやアない。」

わざと、ふしよう不承、田代もそういいつゝ立上った。——と、そのとき、急におもての格子があいた。

「御免……」

九

……聞覚えのある声である。——おもわず田代は二人の顔をみた。

「どなた？」

小倉の代りに三浦が突ツ慳貪にそれにこたえた。

「へえ、わたくしで。——吉沢で……」

「吉沢？」

……といえは「矢の倉」の男衆おとこしゆ。——中洲時分から附いて
いる由良のところの男衆である。

「何だ、君。——誰かと思つた。」

障子をあけて拍子抜のしたように田代はいつた。

「へえ。——実は、いま、お宅へ上りましたので……」

相手はあいそよく中腰を屈かがめた。

「うちへ？」

「へえ。」

「何か、用……？」

「へえ、その。——一寸その『矢の倉』までお越しをねがいた
んでございますが。」

「帰って来たのかい、先生？」

「へえ。」

「何日いつ？」

「今日こんちその急に。」

「急に？」

「へえ。」

「どうして？ ——それより、しかし、どこへ行ってたんだい、

先生？」

「へえ、修善寺へ。」

「だろうと思つたんだ。——きつとそうだろうと思つたんだ。——けど、何だつてそんな。——何だつてそう急に……？」

「いゝえ、それが。——よく分りませんが、しかし。——何かしかしそのことでみなさんにおいてを願うような……」

「と、あたしだけじゃアないのかい？」

「へえ、小倉先生にも。……三浦先生のところへもこれからうかうんでございます。」

「いるぜ、君、三浦君も。——矢つ張こゝにいるぜ、君。」

「あ、さよでございますか？——それは大へん……」

「おい、慶ちゃん……」田代はうしろを向いて三浦を呼んだ。

間もなく、吉沢は、もう一けんこれから頭取のうちへ行くといつていそがしく帰って行った。——そのまゝ座敷へ返った三浦と田代は、小倉と三人、急に引緊った感じの顔をたがいにも合せた。

「何だろう？」

とりあえず田代はいった。

「そんなこつたらうと思つたよ。」三浦はおもむろに頤あごを撫で、
「いかに何でもあんまり音無しすぎると思つたよ。」

「何が？」

「いゝえ、大将がよ。」

「知らなかつたんじゃアないだろうか？——急にそれが分つた

んで、驚いてすぐ……?」

「そんな馬鹿な奴があるものか。」

「とは思うけど……」

「そんなことなら、しかし、頭取が来なくつちやアならない。」

小倉はしずかに口を開いて「それを吉沢がつかいに来たのはこれは……キツとこれはそうじゃアなく外のことだ。」

「そうかしら?」

「とにかく、しかし、すぐ来いっていうんだから行かなくつちやアなるまい。——出かけようじゃアないか。」

「何だかしかし気味がわりいなア。」

「なぜ?」

「なぜってさ。」

「何をいやアがる、『菊の家』を助かりやアがつたくせに……」
そういつてすぐまた三浦は立上った。

……行つてみて驚いた。——明るい燈火あかりの輝きのなかに、由良と、筑紫と、汐見と、じつとそれ／＼、眼をふせ、眉を曇らせていた。

だまつて由良は一通の手紙を三人のまえに出した。——三人はおず／＼それをあけてみた。——信州のある片田舎から由良にあ

てよこした若宮柳絮の書置だった。

……一時間あと、小倉と田代は、汐見と一しよに若宮のその自殺した場所へいそぐため上野から汽車に乗った。——三浦は、あとから来た頭取の岩永と二人で、一座の重立ったものゝところへそのことを触れてあるいた。

夕焼雲

……空くうに、夢のように一月はすぎた。——ということとは若宮の
ことの後始末のうちにあわたゞしくその年は暮れて行つた。（葬
式は、書置に、出来るならそうした儀礼がましい供養がましいこ
とは一切やらないでくれという意味のことのかた／＼書かれて
あつたのによつて、由良は、ほんの内輪の、かたちばかりの告別
式を自分の手で執とり行おこなつた。——勿論、それについては、何と
しても相手の、若い、美しい、売れるさかりの華奢はでをきわめた人
気ものだけに……それには、そうした、あたりまえでない、世間
の眼をみはらせた最後だけに、同情だの憐憫だのおせっかいだの、
交つたいろ／＼の非難や不服をいうものもあつたが、頑として由

良は、つねのその「矢の倉」のさまに似ず、決してそれに耳を藉かさなかつた。そうして、強情に、あくまでそのかれの言分を通した。——一つには、それは、汐見と小倉と田代の三人が引取りに行つて来た亡なきがら骸。……骨にしてさびしく抱えてもどつたそれを、自分の手に押えて、いくらしても由良は若宮の親たちへわたさなかつた。……それも、矢つ張、書置をたてに、何としてもその親たちからの要求を肯がえんじなかつた。——で、そのあと春になると、小倉も、三浦も、田代も、従来の由良一座の奥役の手でそれ／＼稼げる口を……といつても三人一しよではなく、わかれ／＼のお預けながら、でも、そのために、どうにかまア正月を遊ばなくつてすむしがくが与えられた。——勿論、それには、由良のなみ

くでない心づくしをはつきりその背後にみてとることが出来た。——いうまでもなく「若宮一座」というものは、若宮のいなくなつたとともに、影もかたちもとぐめず、うやむやに煙のように消え去つた。

一月の二十日すぎになつて、それ／＼みんな、おの／＼のその出さきから帰つて来た。小倉でも、三浦でも、田代でも、……またその外の、田代以下の四五人の人たちでも、そのまゝそこにいつこうと思えば、……そのまゝもつと働こうとさえ思えばいくらでもそこで働くことが出来たのだつたが、さすがに誰も、いざとなると、東京恋しく約束の日限ひぎりだけで、いそいでみんな帰つて来た。——よしそれが以前のようなさまはなく、雨も漏れば、風

もみじめにふきこむようなそんなしがない巢になったといつても、かれらにとつては、永年の住み馴れた、何ものにも替難い可懐なつかしい古巢だった。——よし、また、どんなに旅へ出て手厚くされようと、どんなに余分なものが掴めようと、どんな大したおおなだい大名題のようにふるまえようと、（実際、それは、旅へ出て、そうした田舎をばかり始終あるいている人たちのなかへ入れば、始終東京で、それも大きなところではかり踊っているものは、知らない間についている身の箔が自分にさえはつきり分るほどだった。おそろしいのは育ちであり、また、修業の貴さだった。田代のようなふところ子にしてそうだから、小倉や三浦のような、千軍万馬往來の、そういうビタのなかにも永年いたことのあるものにはなお

のことそうだった。だから、彼等にとって、そんなことは何の
ことでもなかった。——^{ひと}偏えに、それよりも、親身な、親切な、
弟子おもしろい師匠の膝下へ一日も早く帰りたかった。

二

で、帰るとすぐ、みんなそれ／＼帰ったことのあいさつに
「矢の倉」へ顔を出した。

田代は……ほんとうなら、かれは、先方^{さき}の打日^{うちび}の都合で、もつ
と早くも帰れるのだったが、前以て細君のところへいつてやつて
置いた日取よりつまりはそこに二三日だけごまかしのきくものゝ

出来たのをいゝことに、いえば棒さきを切り、途中で汽車を下りてまえくから鼯負になつてゐる名古屋の客のところへ骨休めに寄つた。——が、結句、まアもう一日、いゝじやアないか、明日まで。……引留められるまゝ、うかくと、いゝ氣になつて酔っぱらつてゐるうち三日というもの余計にととうと足を出した。——で、氣がついて、狼狽あわてゝその晩汽車に乗り、あくる朝東京駅へつくといそいで家へ帰り、一月の間ほとんどそればかり着いた洋服を脱ぐとそのまま湯にも入らずすぐに「矢の倉」へ飛んで行つた。——なぜそうしたのか、そんなにまでする必要がどこにあつたのか？ ……かれは自分にも分らなかつた。……てれかくし、……細君に対してのてれかくし。——つまりはたゞそれだけ

だつた……

行くと、ちようど、小倉と三浦とが言合せたようにさきへ来ていた。書齋の次の間に火鉢を控えて涼しい顔ですわっていた。――小倉も、三浦も、ともにその前の日ぐらい帰つて来たのらしかつた。

「いまお前のうわさをしていたところだ。」

書齋の大きな机のまえから由良はいった。「いつ帰つて来たんだ、お前は？」

「へえ、今朝……」

「今朝？」

「へえ、いえ、一寸帰りに名古屋へ寄りましたもんで……」

うつかりそういつて、田代は、三浦のそばにいることにすぐ気がついた。失策しまつたと思つた。うわさをしていたという以上、相手が三浦なら、ロクなことはいわれないにきまつている……

「何しに？」

「へえ、一寸……」

「飲みにか？」

「へえ、いゝえ……」

「いゝから、まア、飲め。——たんとずっこけろ。——若いうちはそのほうがいゝ。」

「……………」

おもわず田代は由良の顔をふり仰いだ。——いつにもそんなこ

とをいったことのない人である、勝負事のつぎには酒のことをやかましくいう人である、飲むな、決して飲むな、いゝ役者になろうと思つたら決して飲むな、始終いまゝで、自分にむかつてもうばかりしかいわなかつた人である……

「若宮が……お前の半分でも若宮が飲んだらあんなこともしなかつたろう。……もつと外に思案のしようもあつたろう。……そう思うんだ、俺は……」

すぐ、また、言葉を継いで由良はいった。——そういつて、わざと、晴れやかに、機嫌よく由良はわらつた。

三人、そつとさびしく眼を交した。

三

「たしか、しかし……」さりげなく小倉はいった。「ちょうど、今日、三十五日に……?」

「そうだ、そうなるんだ。」由良はすぐ引取って「だから、これから、墓まいりに行ってやろうと思っているんだ。」

「喜んでおりましたよ、しかし……」

田代はそれに調子を合せた。

「誰が?」

「いゝえ、若宮君……」

「可哀想な男よ。」由良は、それにはこたえず、半ば自分にいう

ようにいった。「日の経つにつれてだんく身にこたえて来る……」

「へえ。」

「どこかへ行くのか、これから？」と、急に、由良は眼を上げた。

「あたくしでございますか？」

狼狽あわて、田代はいった。

「いゝえ、小倉も、三浦も……？」

「べつに、いえ……」

そういつて小倉は三浦をふり返った。——来たぜ、おい。……

三浦はそういつた工合にそツと頤あごをしやくツてみせた。

「もし体があいているなら、どうだ、一しよに行かないか、俺と

「？」

「へえ、有難うございます。」田代は頭を下げた。

「有難うございますじゃアない、行かないかとさそうんだ、こつちは。——よかつたら行つてやれ。」

「どうせ、いえ、行こうと思つてゐるんでございますから……」

「どうだ、そつちは？」

「いえ、わたくしども。——お供いたします、こちらも……」

小倉に代つて三浦はこたえた。

「じゃアすぐ。飯をくつて出かけよう。」

由良は性急に手を叩いて女中を呼んだ。昼の仕度をいいつけると一しよに自動車の用意を命じた。——さアといえはさアが江戸

つ子の悪い病である。

「墓まいりつて奴は大ぜいの方がいゝ、——一人や二人だとわるく料簡がこずんでいけねえ。」

そのあといつそまた機嫌よく由良はわらつた。

それからじき一行五人は……由良とその三人の外に吉沢が加わつた。……谷中の天王寺の五重の塔のまえで自動車を下りた。空のあさくと晴れた、風のない、日のいろいろのおだやかに和んだ午後だった。要木かなめだの柾木まさきだの、低くさびしい垣つゞき。……その間の、人けのない、一すじ石のいろいろの白くしずんだ細道のうえに、櫛しきみをもつたり線香を煙らしたりした弟子師匠の、五つのそのもつれて行く影がしずかに濃く落ちた。

「陽気は正直だ、——わずかなところでぐツともう春めいた。」
さきへ立った由良のふいとそう振り返っていった。

「そうでございます。——このまえ三七日にまいったときにはまだ……」

それにこたえて吉沢のそういうのかぶせてまた由良はいった。
「どこもかも凍てついていた。——いまの時間でまだ霜柱がとけなかった。」

四

あたらしい、木の香の濃い塔婆にかこまれ、
鼻負さき客さきか

らの心をこめた美しい……というよりは、早咲の梅だの水仙だの、
いつそ寂しい、しめやかな花のかけにうもれた、古い、小さな墓
……それは、若宮の、ありし日のおもかけを偲ばせるには、あま
りに惨めないじらしいものだった。……のまえにやがて五人は立
った。——由良は、帽子と外套を吉沢にわたし、そのまえにすゝ
んで、しずかにしばらく額ぬかをふせた。——小倉も、三浦も、田代
も、いまさらのようにあの晩のことを……書置によつて、若宮の、
すでにもうこの世にいないことを知つたあの晩の、ポカンとした、
うつろのようになつた心もちを果敢はかなくおもい返した。——と同
時に、なぜ死んだ？ ……むすぼれ解けないその謎が……日の経
つにつれていよ／＼濃くなつて来たそのうたがいの影がいまさら

のようにまた三人の胸を掴んだ。

「お待ち遠……」

そういつて由良はそのまえをはなれた。——手近の要木垣に外套を投げかけ、そのあと代つて、小倉がすぐそのまえに立った。

「……感心な男よ。」

半ば自分にいいながら由良は帽子だけ吉沢からうけとつた。

「へえ？」 田代はいつた。

「いゝえよ、西巻よ。」

「………?」

「ちやんともう今日でも早く参詣に来ている。——むかしの奴ア、矢つ張律儀だ。」

田代も、三浦も、由良のその指すほうへ眼を遣った。——その梅だの水仙だの、なかにあつて、冬つばきの、哀しくもやさしい真紅のいろを綴っているのが金平さんの心いれだった……

「それにしても、これ。」すぐまた由良はいつた。「いつまでこの墓の中に居候させて置くことは出来ない。——そう思つていそがしている。——だから百ヶ日までには、ほんとうの、若宮だけの奴が出来る。」

「あゝ、それは……」

田代はそれにこたえた。

「出来たら、そこで、にぎやかに追善をしてやろうと思つている。

——当人の料簡がいじらしいから、……当人のそういうのがもつ

ともだからいまゝでこつちも強情を張りつゞけた。入らざる意地を立てぬいた。——が、もういゝだろう。——百ヶ日までになればもういゝだろう。」

「へえ。」

……とはいったけれど、田代には、若宮がまたどうしてそう儀礼がましいことや供養がましいことを一切やらないでくれ……なぜわざ／＼そうしたことを書置に書いたのか？ どうしてそうしたことをやられるのが嫌なのか？ ——かいくれその理由が分らなかった。——ということは、また、同時にそれを、その遺言を、そうまで師匠がどうしてそんな大切だいじにかけるのか？ どうしてそう強情を張りつゞけたのか？ どうしてそう意地を立てぬいたの

か？——もつとそれより解げせないのは汐見と小倉と自分とでも
つて帰った骨を何としても親たちの手にわたさない……飽くまで
押えて渡さなかつた。……そのいりわけがどうしても田代に分ら
なかつた。——げんに名古屋の客さきでも、根掘り葉掘りそれを
訊かれ、返事が出来ずこと／＼くこまつたのである……

「……………」

だまつて小倉は墓のまえをはなれた。——代つてまた三浦がそ
のまえにすゝんだ。

「しかし……俺もしかし若宮の墓の心配をしようとは思わなかつ
た。」

やがてまた由良は寂しくわらつていった。——どこかで落葉を

焚いている煙が、浅い春を、しずかにうすくとあたりに立迷った。

五

……五重の塔の下まで五人は引つ返した。そこで、小倉、三浦、田代の三人は体よく由良とわかれた。——由良は吉沢をつれて待たせてあつた自動車に乗った。

そのまゝ、三人は、上野の方へは逆の、広い墓地のなかをなおあるきつゞけた。

「いゝのかい、こんなところへ来て？」

ふいと、田代は、立留つてあたりをみ廻した。

「いゝからあるいているんだ。」

邪慳にそういつて三浦はずん／＼さきへあるいた。

「どこへ行くんだ、しかし？」

「停車場へ行くのよ。」

「どこの？」

「日暮里のよ。」

「日暮里？」

「大丈夫か、おい？」そばからしかし小倉もいった。

「だまつて附いて来ねえ。——何にもいうこたアねえ。」

みるかぎり墓と塔婆の冷々とうちつゞいた細い道を右へ曲つた

り左へ切れたりした。——が、やがてその墓地を出抜けて、立並んだ格子づくりの小さなその家々の間に、おもいもよらない木立だの寺の門だのをみ出したりする、しずかな、しら／＼した感じの古い往来のうえに三人は出た。——そこにはまれな人通りの外に車の音さえ……それこそ自転車のベルの音さえどこにも響いていなかった。

「御機嫌だったな、しかし……」

急におもい出したように田代はいった。

「何が？」三浦はふり返った。

「いゝえよ、おやじよ。——いつにも、あたしア、このごろおやじのあんなハッキリした顔つきをみたことがない。」

「以前は始終あゝだったんだ。」

「だから、いゝえ、このごろとっているじやアないか。——以前、始終、あんなだツたこたアあたしだつて知っている。——知ってるから、だから、あたしアそういうんだ。」

「どこへでも俺たちをつれて出る。——その料簡になればいゝんだ。——うそにもそうした気になればそれでいゝんだ。」自分にうなづくように小倉はいった。

「何だぜ、あれ。……わかれたくなかったんだぜ、まだ。……これによるとどツかへもつと連れて行くつもりだったかも知れないぜ。」

「このうえ窮命させられてたまるものか。」

吐出はきだすように三浦はいった。

「可笑しいよ、実際可笑しいよ。」田代は急にわらって「おやじの前へ出ると、慶ちゃんでも不思議に手も足も出なくなってしまうから可笑しいよ。」

「ふざけちゃアいけねえ。」

「そうじゃアないか、ほんとじゃアないか。——まるで猫みたいに音無しくなってしまうじゃアないか？」

「何かいえばうるせえからよ。」

「そんな、また……」

「この二三年、どこへ行くにも必ず一人だった。」小倉は話をあとへもどして「よしそこに、眼のまえに誰がいたって、決して一

しよに来いといわなくなつた。——どうしてそうこずんでしまつたか？——あんなにぎやか好きの人がどうしてそうしゅんでしまつたか？——気にしていたんだ、俺は……」

「そうなつてからだ、しよツちゆう額に八の字をよせるようになつたのは。」三浦はいつた。「不思議に、今日は、はじめツからその八の字が出ていなかつた。」

「いゝからまア、飲め、たんとずツこける、若いうちはそのほうがいゝ。……驚いたよ、あたしア。——何年にも、あたしア、あんなさばけたことをおやしにいわれたこたアない。」

「うん、あれは俺も一寸^{ちよいと}おどろいた。——何をいい出すかと思つた。」

「が、そのあとがいけねえ。——お前の半分でも若宮が飲んだらあんなこともしなかつたろう、もつと外に思案のしようもあつたろう。——あいつは一寸痛かつた。」

わらつて小倉はいつた。

六

「けど。」田代はそれを遮るように「知ってるんだらうか、おやじは？——分ってるんだらうか、おやじには？」

「何が？」

すぐ、また、三浦はいつた。

「若宮君の死んだわけがさ。——どうして若宮君の死んだかゞさ。」

「嫌になったからよ。——生きてるのがいやになったからよ。」

「そんなこたア分ってる。——生きてるのがいやになったから死ぬ、だれだつてそんなこたア分ってる。——こつちのいうのはその、なぜ、じゃア、いやになった？　なぜそう生きてるのがいやになった？　……それをいうんだ、あたしア。」

「みねえのか、お前、新聞を？」

「みているさ、毎朝。——それも君のように、いちく大屋んとこへ頭を下げて借りに行くんじやアない、ちゃんと自前で、うちへ毎日来るのをちゃんとみているんだ。」

「うるせえな、大きにお世話だ。——どっちだつて読む味にかわりはねえ。」

「幾らかわりはないツたつて……」

「そんなことよりみていたら分りそうなもんじやアねえか? —

—あんなにいろく……七十五日まだ経たねえんだから無理もねえが、いまだに好きなことをいろく書いているじやアねえか?」

「というの?」

「おもう女に捨てられたからだとか、借金で首が廻らなくなつたからだとか、師匠にそむいて旗擧しようとしたのがうまく行かなかつたからだとか。……一番可哀そうなのは気がへんになつたらだ、でなくつても前々から工合が可笑しかった、だから用心し

て転地させた。——と、附いて行つた女房の眼をぬすんで、予て用意のピストルを出して……」

「君は。——君は、慶ちゃん……」いそいで田代はいつた。「ほんとにするのか、そんなことを？——ほんと々思うのか、君は？——でたらめな、そんな、いゝ加減な、根も葉もない……」

「……ことゝは思わねえ。」三浦はずけりといった。「何をいつてやアがるとは思つたけれど、でもない、また、大きにそうかも知れねえ。ことによつたら、此奴^{こいつ}……」

「そんなことをいつて、君……」いそいでまた田代は遮つた。

「じゃア、君は。……いゝえ、どこにそんな若宮君のおもう女がいた？どこに、そんな、若宮君に首のまわらないほどの借金が

あつた？——『若宮一座』の話だつて、いまになつてみりやア、チヨコと楽天坊主とが勝手にそうしくんだ仕事で、ほんとうに若宮君に、そんな気があつたかどうかそれさえ分らなくなつて来ているんじゃないか。——気がへんになつたといえれば一番それが手ツとり早いもんだから……都合もそのほうがいゝもんだから、平生若宮君をよく思わない奴なぞみんなそう決めていやアがる。^{ふだん}

——けど、気のへんになつたものにあの書置が書けるか、君？

——あんなちゃんとした覚悟をきめたものが書けるか、君？——それより可笑しいのはピストルだ。——前々から少しでもそんなけぶりのあつたものにどうしてそんなあぶなツかしいものをだれが持たせる？——もっとそれより滑稽なのは附いて行つたと

いう細君だ。——一体、君、若宮君に細君があつたかい？——
細君みたような人でもあつたかい？——あたしア知らないよ、
若宮君にそんなものゝあつたという話だつてあたしア知らないよ。
——あたしの知つてる若宮君は一人ものだった。——勿論、信州
へだつて一人でいつたんだ。——死ぬまで、だから、若宮君は一
人ものだったんだ。」

「じやアどう思うんだ？——どう思うんだ、お前は^{めえ}？」
いっそ冷かに三浦はいつた。

「分らないんだ。——分らないんだ、あたしには。——だから訊
くんだ。」

じれツたそうに田代はいつた。

七

「ざまアみる。」わざとそう憎にくてい体たいにいったあとで三浦はいった。
「おせえてやろうか？」

「何をいやアがる。」田代は中ちゆうツ腹ぼらで「小倉君、分つてるか、君には？」

「知ってるんだ、三浦は。——俺もこの男に聞いたんだ。」小倉は三浦のほうを向いて「外のものじゃアない、話してやれよ、おい。」

「知ってるだろう、お前、若宮んとこの家の中を？」

それにはこたえケロリとしたさまに三浦はいった。

「若宮君のとこの？」

「どんなさまだかつてことをよ。——若宮のおやじやおふくろつてものがどんなしだいだかつてことをよ。」

「それは知っている。——お父つあんて人もおつ母さんて人も、如才のない、愛想のいゝ人たちだ。——だから家ん中は始終にぎやかだ。」

「そんなことをいつてるからものゝ間違いが出来るんだ。」

「どうして？ ——若宮君は、あの通りの、世間でも評判の親おもいの人なんじやアないか？ ——そうされゝば、人情で、誰だつてそうするのが当りまえかも知れないけど、そういつても、だ

から、お父つあんやおつ母さんのほうでも若宮君を大切だいじにした。

——若宮君のことつていうと二人とも夢中だった。——それは、
まア、麒麟児といわれた子役のむかしから手塩にかけて、あれだ
けの立派な役者にしたことを思えば、したほうにしたつてされた
ほうにしたつてうれしいわけだ。……お互の間のまるく行かない
つてはずはないじゃアないか。」

「まるく行つてるものが、じゃア、何だつてあとでべつになつた
んだ。」

「べつに？」

「あとで、若宮、おやじやおふくろとわかれて別に一人で家をも
つたじゃアねえか。」

「もったき。——もったけど、それは……」

「じゃア、もう一つ、それほど大切だいじにおもつてるせがれに何だつていつまで女房をもたせなかつたんだ？」

「それは若宮君が——若宮君が自分の好きで……」

「お前は、めえじゃア、ずっとまえにいたあの芳町のおそつていう芸げいしや妓のことを知らねえのか？」

「知つてるとも、よく知つてる……」

「あの女がどんなに若宮に惚れ、若宮がまたどんなにあの女に惚れていたかそれじゃア知つてるだろう、お前だつて？」

「だつてしかしあの女は。——あの女は若宮君を捨て、大阪の……」

……

「じゃアねえんだ、無理から生木なまきを裂いたんだ。……おやじとおふくろとで無理から二人をわかれさせたんだ。」

「ど、どうして？」

「勘平さんじゃアねえが、三十になるやならずの若い身そらの役者……というよりは芸人が女房をもつちやア折角の人気に障るからよ。」

「そ、そんな……」

「分らねえことはねえといったところでいまさら間に合わねえ。

——そもくの大根おおねから間違つて来ているんだ。——若宮のおや

じやおふくろのあゝ若宮を大切にしたのはつまりは猿廻しが猿を大切に……手めえたちの稼しょうばい業い道具を大切にするのと同じ

だつたんだ。」

「しかし……」

「しかもへちまもねえ、あいつらは若宮の、ほんとうのおやじでもおふくろでもねえんだ。——若宮のほんとうの親たちは外にあるんだ。——若宮は藁の上から親知らずにもらわれて来た奴なんだ。」

「つまり十一月の芝居のあの芸妓よ。」ふいとそのとき小倉は口を出した。「お前がしきりに感心していたあの、悪い親同胞おやきょうだいをもつたゝめに苦勞するあの若い芸妓の役よ。——若宮は、つまり、舞台であれ、自分の芝居をみせていたんだ。」

「……………」

「あの芸妓はしまいに気が違つた。——が、若宮は、氣の弱い、あゝいうやさしい男だけに、氣の違わねえさき手めえで死んだんだ。」

「……………」

「今度の『若宮一座』の話だつて若宮は知らねえことだつたんだ。——おやじやおふくろの勝手にさりやくしたことなんだ。——チヨコと楽天坊主にのせられて好きな熱をふいてまわつたゞけのものなんだ。」

八

……トタン塀のなかに立並んだ古い大きな桜の木でその枝々は
往來のうえまで拵つている。——みるとそれは小学校だった。——
——その塀の外れに、三四けん、荒物屋だの煙草屋だの、小さな店
のつゞいたあと、三人の行くてに、石の大きな鳥居が一ぱい日を
浴びてしずかに立っていた。

「おや？」急に三浦は立留った。「此こいつ奴アいけねえ。」

「何だ？」

ともに小倉も立留った。

「こゝはもう諏訪神社だ。」

「そうよ。」

「こんなところへ来ちやア。——日暮里の停車場はずつとあとだ、

この……」

「いやだぜ、おい。——だから、あたしの……」

田代のそういいかけるのを三浦はかぶせて、

「ぐずくいうこたアねえ。——日暮里を来すぎたら、こゝまで来たんだ、もう一呼吸ひいきの伸して田端へ出りやアいゝ。」

「田端？」

「驚くこたアねえ、こゝを抜けて崖ツぶちへ出りやア一足だ。」

日を浴びた鳥居も、また、玉垣も、枯々とした木々の、入交つた枝の影をさびしくその膚にうつし出していた。——斜はすに白くつ

めたくのびた石だゝみのうえをそのままゝ広い境内へ入ると、櫓だの、銀杏だの、枯れた梢のたか／＼と空にそゝる間でみたらし

の手拭がそよりとも動かず、神樂堂もむなしく戸を下ろしていれば、見晴しの、むかしながらの崖のうえに並んだ茶店もたゞその心細い骸をさらしているばかりだった。——前後左右すべてヒツソリと、三人の外にはどこにもそこに人のかげがなかった。

「むかし、俺たちの、始終こゝへ小遣いをかせぎに来たことをお前なんぞ知らねえだろう？」

そういいながら三浦はあたりをみ廻した。

「知るもんか、そんなこと。」

「活動をうつしに来たんだ、活動を。——『金色夜叉』でも『ほととぎす』でも、その時分には、みんなこゝで……こゝだの、花見寺だの道灌山だのでみんなうつしたもんだ。」

「外にはどんな連中？」

「どんな連中もこんな連中もねえ、その時分の大部屋のものは内な密いしよでみんな稼いだんだ。——そのまた中間なかへ入ってサヤをとる

奴なんぞいたんだ。」

「誰だ、それは？」

「チヨコなんぞその先立だったのよ。」そういつて小倉のほうをかえりみた。「チヨコ、彼奴あいつ、あの時分でいゝ加減こしらえたと思うがどうだ？——あれからだもの、彼奴のちいゝし出したのは……」

「そうかも知れねえ。」そういつて、また、小倉は田代のほうをふり向いた。「そういえば、おいどうした、いつかの金は？」

「まだあのまんまになっている。」

「早く返してやれ。——でないと、菱川、ことによるとあの男も死ぬかも知れねえ。」

「死ぬかも？——どうして？」

「半月ほどまえ、出さきで急に引っくり返り、そのまんまずっとうちに寝ているそうだ。」

「どうして？——どうして、また……？」

「脳溢血だ。」

「脳溢……？」

九

田代はそういいかけたがすぐ「誰に聞いた、そんなこと？」

「先刻さつき、吉沢に聞いた。」

「吉沢に？——どうしてまた吉沢が……？」

「西巻に聞いて来たんだ。」

「どうして？——どうして金平さんが？——可笑しいじゃアないか、そんな……」

「ちツとも可笑しかアねえ、どこからかそれを聞くと一しよに西巻は見舞に行ったもんだ。」

「見舞に？」

「いくら犬と猿のような仲でもいざとなれば古い附合だ、三十年

来の深馴染だ。……菱川のほうはどうでも、西巻にすれば、あゝ
いう男だ、矢つ張どこか心細い気もするだろう。」

「みていねえ、チョコにもしものことがあれば誰よりもさき涙を
こぼすのは金平だから……」

ふいとそばから三浦はいった。

間もなく三人は境内の寂しい木の間をもと来た道のつゞきへ出
た。ぽつんと一けんだけそこに立った小さなペンキ塗の西洋館に
ついて曲るとそこはだらくと低くなった坂だった。——片側は
高い石垣の、日のさゝない、暗い、ヒツソリした道のうえに冬の
名残の落葉が小砂利まじりに堆うずたかかった。

「しかし、それ……」しばらくしてまた田代はいった。「脳溢血

かしら、ほんとうに？」

「どうして？」

「矢つ張、それ、いくらか若宮君のことを神経に……とでもいうんじやアないかしら、それ？」

「ビツクリして眼をまわしたか？」三浦はすぐ茶化して「『夏小袖』の灰吹やじやアあるめえし……」

「いゝえ。……いゝえ、そうじやアなしに。——チョコにしたら随分寝ざめがわるかろうじやアないか。」

「そんな男じやアねえ。」

膠にべもなく小倉もいった。

「いゝえ、そんな男じやアなくつても……」

「かつぐとしたら楽天坊主だ。」三浦は引取つて「吾妻に死なれ、若宮に死なれ、これでまたもしチヨコに死なれたらいかに料簡の太え奴でも……料簡の太え奴は太え奴は太え奴だけそれだけどツかに脆いところがある。——いゝ加減気を腐らすだろう。」

「それに懲りて身にすぎた望みを起さなくなればそのほうが天下のためだ。」

「ふざけちやアいけねえ。……一度や二度へたばつたつてそのまんま音無しくへたばり切る相手じゃアねえ。——一度みこんだら決してあきらめめるこつちやアねえ。」

「そんなにも、けど……?」

「芸妓でも、女優でも、あいつにこうとみこまれたら助かりっこ

ねえ。——いくら逃げてもきつともものにされる。——そのまた逃げるのを無理から追ツかけてしめるのがあいつの味憎なんだ。」

「押しの強い奴にはかなわねえのよ。」小倉はいつた。

「出来りやアいゝんだ、話さえつきやアいゝんだ。」三浦はそれをうけて「たゞそれだけ……たゞそれだけだ。……恥も外聞もあるもんじやアねえんだ。」

「そうかなア。」

感心したように田代はいつた。

……その坂は尽きた。が、それよりも、もつと広い、埃つぽい傾斜がすぐまた三人のまえに展けた。——それを上りつめたとき、三人は、省線電車の間断なく馳せちがう音響ひびきを脚下に、田端へつゞ

く道灌山の、草の枯れた崖のうえに立った。——み渡すかぎりの、三河島から尾久へかけての渺びようぼう茫とうちつゞいた屋根々々の海。

——その中に帆柱のように林立する煙突の「新しい東京」の進展を物語るいさましい光景けしき……「変つたなア。」と歎息するように三浦はいった。「知るめえ、お前めえなんぞ。——ついこないだまで、こゝいら、ずっと荒川のふちまで一めんのもう田圃ひとみだつたんだ。」
「一めんのねえ。」遠く田代も眸ひとみを放つた。

「三月から四月にかけての菜の花のさかりのころなんぞつたらなかつたもんだ。」

「菜の花のねえ。」

その光景のうえにひろがった大空。——水のように晴れたその

大空に影を曳いた夕焼雲。……小倉はそれをみて無言だった。——淋しさやうかびて遠き春の雲、そうした句をしずかにかねはおもい案じていた。

……田端から電車に乗って上野で下りた三人はそこでまた浅草まで地下鉄道に乗った。——三人はいつかの向島のかえりのようにまた「菊の家」へところろざしたのである。

（「大阪朝日新聞」一九二八年一月五日～四月四日）

青空文庫情報

底本：「春泥・三の酉」講談社文芸文庫、講談社

2002（平成14）年8月10日第1刷発行

底本の親本：「久保田万太郎全集 第二卷」中央公論社

1968（昭和43）年4月25日

初出：「大阪朝日新聞」

1928（昭和3）年1月5日～4月4日

入力：kompass

校正：門田裕志

2014年1月1日作成

2014年6月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春泥

久保田万太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>